

平成 2 8 年度全国学力・学習状況調査の結果概要

～千歳市立小中学校における調査結果～

千歳市教育委員会

平成28年度全国学力・学習状況調査の結果概要

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

- ①義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ②学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- ③そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の対象学年

小学校第6学年及び中学校第3学年

(3) 調査の内容

- ①教科に関する調査（国語、算数・数学）
- ②生活習慣や学習環境等に関する児童生徒質問紙調査
- ③学校の教育活動や教育課程に関する学校質問紙調査

(4) 調査実施日

平成28年 4月19日（火）

(5) 調査実施学校数及び児童生徒数

小学校16校 842名 中学校 8校 847名 （北進小中学校を除く市内全校）

2 教科に関する調査結果

(北海道教育委員会の分類方法による9段階)

相当高い	・・・	7ポイント以上	ほぼ同様(下位)	・・・	-1ポイント以下-3ポイント未満
高い	・・・	5ポイント以上7ポイント未満	やや低い	・・・	-3ポイント以下-5ポイント未満
やや高い	・・・	3ポイント以上5ポイント未満	低い	・・・	-5ポイント以下-7ポイント未満
ほぼ同様(上位)	・・・	1ポイント以上3ポイント未満	相当低い	・・・	-7ポイント以下
同様	・・・	±1ポイント			

(1) 小学校教科全体

小学校教科全体		国語A	国語B	算数A	算数B
平均正答数	千歳市	10.6問/15問	5.3問/10問	12.1問/16問	5.5問/13問
	全道	10.7問/15問	5.6問/10問	12.0問/16問	5.8問/13問
	全国	10.9問/15問	5.8問/10問	12.4問/16問	6.1問/13問
平均正答率	千歳市	70.8%	52.7%	75.8%	42.4%
	全道	71.0%	56.0%	75.3%	44.5%
	全国	72.9%	57.8%	77.6%	47.2%
全道との比較		同様	やや低い	同様	ほぼ同様(下位)
全国との比較		ほぼ同様(下位)	低い	ほぼ同様(下位)	やや低い

国語A、算数Aは、全国平均正答率とほぼ同様であるが、国語Bは低く、算数Bはやや低い。

国語Aについては、全国平均正答率とほぼ同様であるが、その差は2.1ポイント(前年度-1.3ポイント)であり、前年度より差が広がっている。算数Aについては、全国とほぼ同様であり、その差は1.8ポイント(前年度-2.7ポイント)で前年度より差は縮まった。

国語Bについては、全国平均正答率より低く、その差は5.1ポイント(前年度-5.1ポイント)で前年度と同じであった。算数Bについては、全国よりやや低く、その差は4.8ポイント(前年度-3.2ポイント)となり、前年度より1.6ポイント拡大した。

(2) 中学校教科全体

中学校教科全体		国語A	国語B	数学A	数学B
平均正答数	千歳市	24.0問/33問	5.5問/9問	21.4問/36問	6.2問/15問
	全道	24.8問/33問	5.8問/9問	22.2問/36問	6.5問/15問
	全国	25.0問/33問	6.0問/9問	22.4問/36問	6.6問/15問
平均正答率	千歳市	72.8%	61.6%	59.3%	41.5%
	全道	75.1%	65.0%	61.8%	43.3%
	全国	75.6%	66.5%	62.2%	44.1%
全道との比較		ほぼ同様(下位)	やや低い	ほぼ同様(下位)	ほぼ同様(下位)
全国との比較		ほぼ同様(下位)	やや低い	ほぼ同様(下位)	ほぼ同様(下位)

国語A、数学Aは、全国平均正答率とほぼ同様であり、国語Bはやや低く、数学Bはほぼ同様である。

国語Aについては、全国平均正答率とほぼ同様であるが、その差は2.8ポイント(前年度0.9ポイント)であり、前年度より差は拡大した。数学Aについては、全国とほぼ同様で、その差は2.9ポイント(前年度3.5ポイント)であり、前年度より差が縮まった。

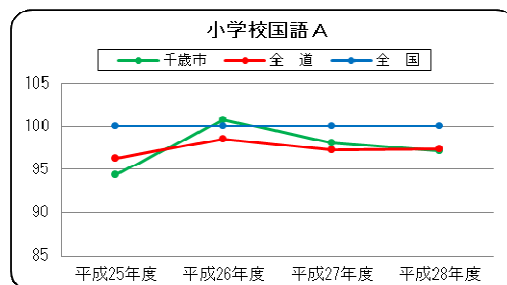
国語Bについては、全国よりやや低く、その差は4.9ポイント(前年度1ポイント)で国語Aと同様に差は拡大した。数学Bについては、全国とほぼ同様であり、その差は2.6ポイント(前年度4.3ポイント)であり、前年度より差は縮まった。

(3) 小学校国語 A (主として「知識」に関する問題)

【平均正答率】

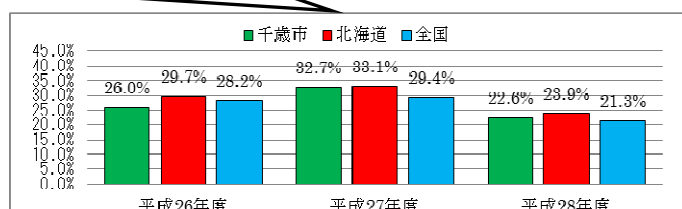
上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
千 歳 市	59.2 94.4	73.4 100.7	68.7 98.1	70.8 97.1
全 道	60.4 96.3	71.8 98.5	68.1 97.3	71.0 97.4
全 国	62.7 100	72.9 100	70.0 100	72.9 100

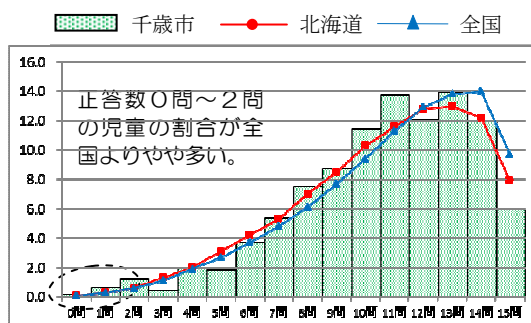


【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる児童の割合】

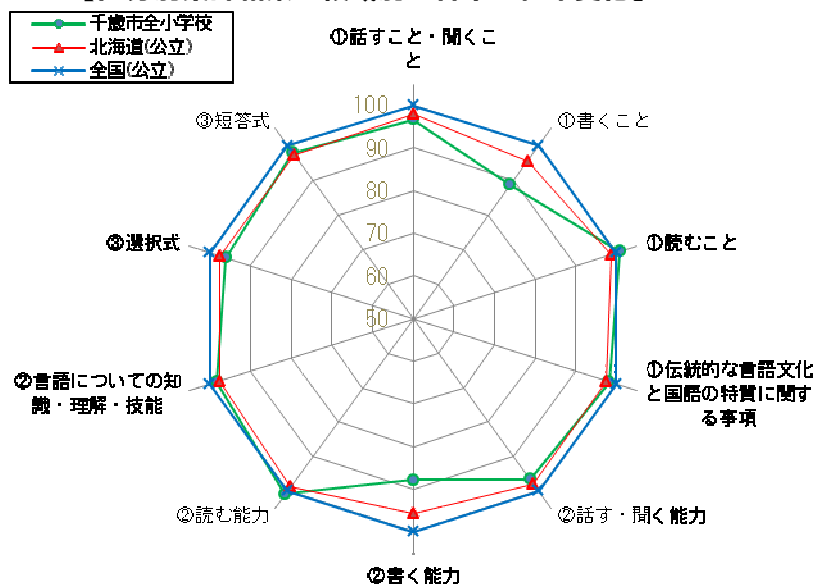
全国と比較すると、前年度より2ポイント差が縮まっている。(正答数の分布状況は右図参照)



【正 答 数 分 布】



【区分別集計結果と領域別正答率の経年変化】



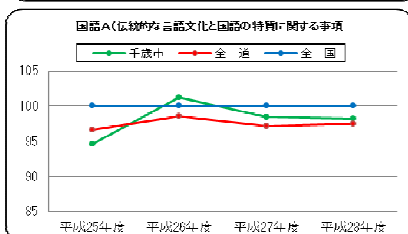
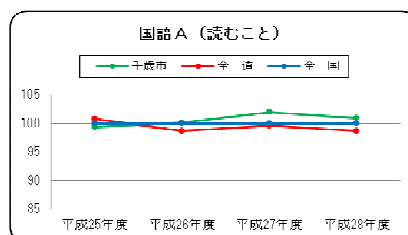
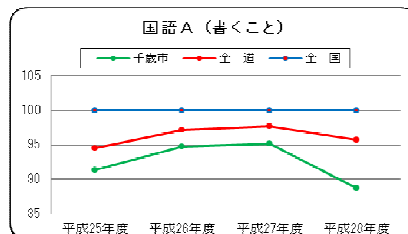
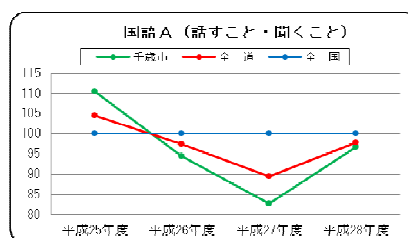
【レーダーチャートの各項目について】
「①」は学習指導要領の項目「②」は評価の観点 「③」は問題形式

「読むこと」「話すこと・聞くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」については、全国と同様という結果であるが、「書くこと」については、前年度を下回り全国との差が拡大している。

「読むこと」については、3年連続全国の平均正答率を上回った。

「話すこと・聞くこと」については、問題数は1問であったが全国と同様の正答率であった。「書くこと」については、全国との差が

過去 4 年間で最も大きく課題が見られる。「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域の問題は8問出題され、漢字の読み、書きについては全国との差は見られなかったが、ローマ字の書き、読みは全国の平均正答率を下回った。今後、千歳市の児童が苦手としている「書くこと」を重点に、目的や意図に応じて、書く事柄を収集し、全体を見通して事柄を整理する能力や引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書く能力を伸ばしていくことが必要である。

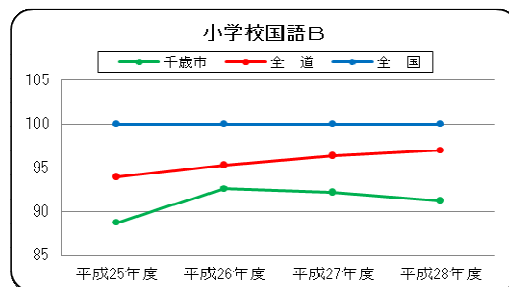


(4) 小学校国語B (主として「活用」に関する問題)

【平均正答率】

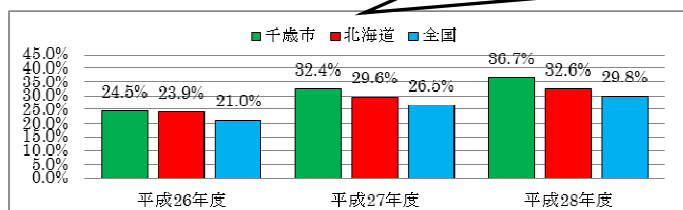
上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
千 歳 市	43.8 88.7	51.4 92.6	60.3 92.2	52.7 91.2
全 道	46.4 93.9	52.9 95.3	63.0 96.3	56.0 96.9
全 国	49.4 100	55.5 100	65.4 100	57.8 100

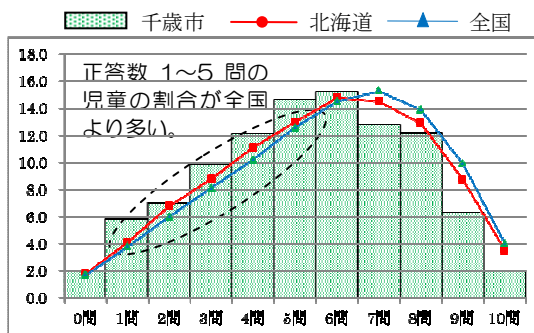


【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる児童の割合】

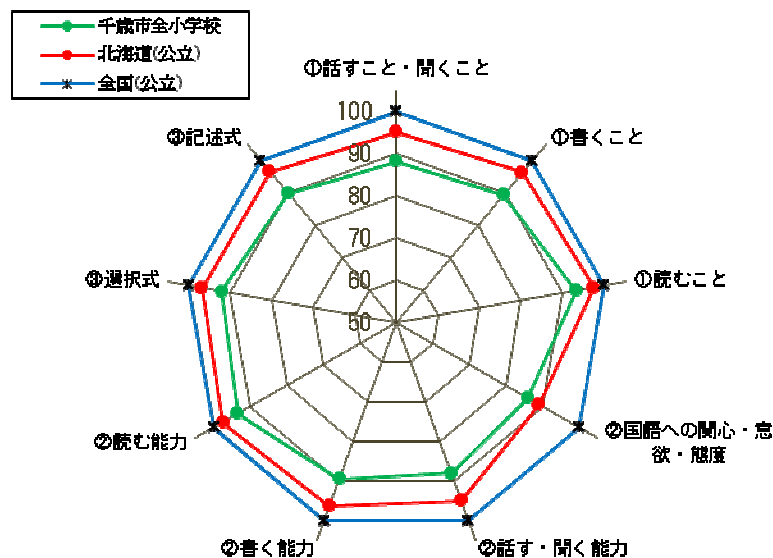
平成 27 年度は全国の差は 5.9 ポイント、平成 28 年度は 6.9 ポイントであり、前年度より 1 ポイント差が広がっている。



【正 答 数 分 布】



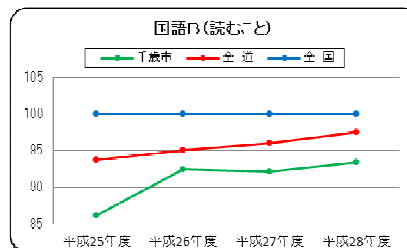
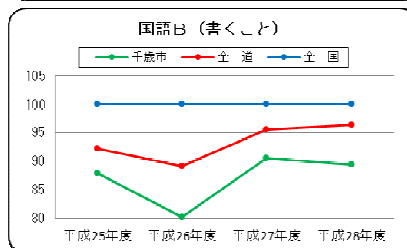
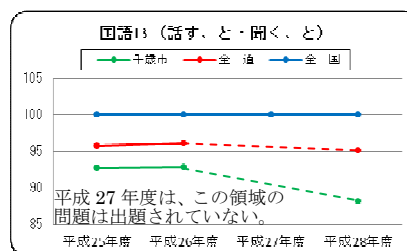
【区分別集計結果と領域別正答率の経年変化】



「読むこと」は、改善の兆しが見られるが、「書くこと」は、変化はなく「話すこと・聞くこと」は大幅な低下が見られる。

「読むこと」は、前年度を上回り、複数の文章を関係付けて読む能力が徐々に身に付いてきている。「書くこと」は、前年度と同様の結果で変化は見られなかった。「話すこと・聞くこと」は、前回調査より大幅に正答率が低下し、質問したいことを整理したり、話の展開にそって質問したりすることに課題が見られる。

今後、質問したいことを整理して、インタビューメモを作成したり、自分の考えとの共通点や相違点は何かなどを観点として、相手の話を注意深く聞くことができるようにしたりする学習活動の充実を図る必要がある。なお、指定された字数の範囲内で書く形式の問題を苦手としている状況が見られることから、使う言葉を指定したり、決められた字数で書いたりする学習活動にも留意する必要がある。



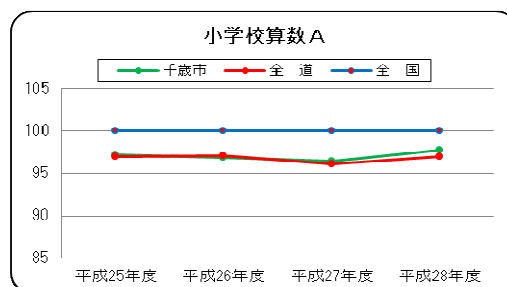
平成 28 年度は、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域の問題は出題されませんでした。

(5) 小学校算数 A (主として「知識」に関する問題)

【平均正答率】

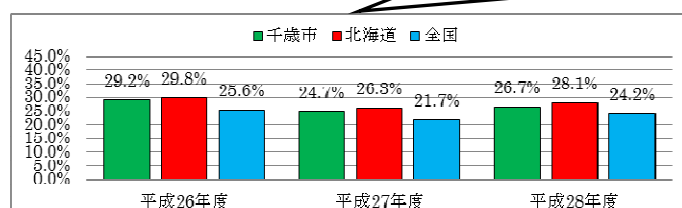
上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
千 歳 市	75.0 97.2	75.7 96.9	72.5 96.4	75.8 97.7
全 道	74.9 97.0	75.8 97.1	72.3 96.1	75.3 97.0
全 国	77.2 100	78.1 100	75.2 100	77.6 100

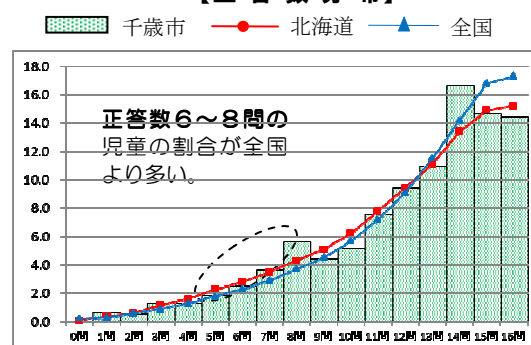


【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる児童の割合】

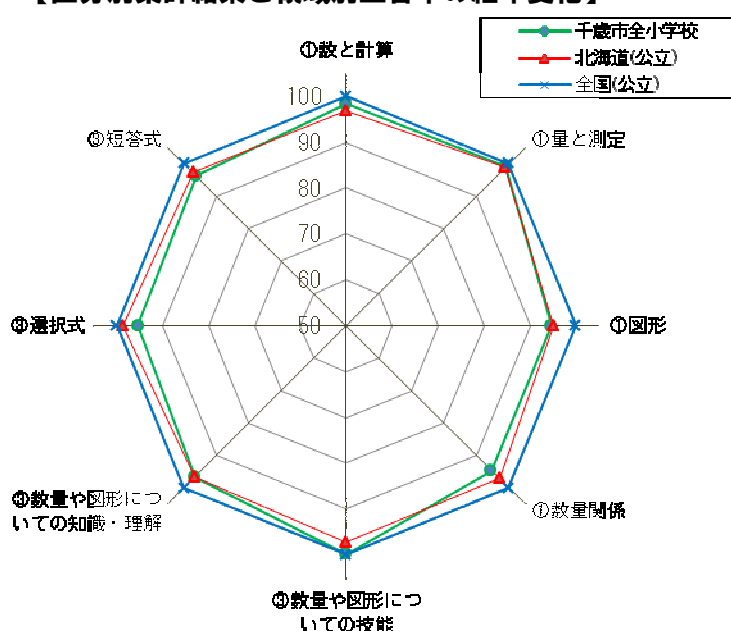
全国と比較すると、前年度より 0.5 ポイント差が縮まっている。



【正 答 数 分 布】



【区別集計結果と領域別正答率の経年変化】

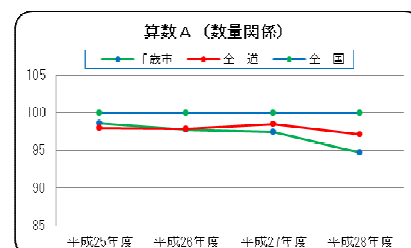
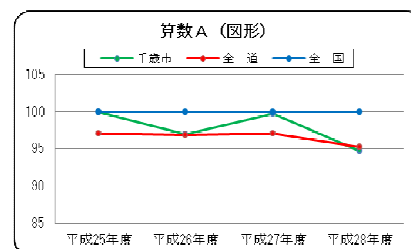
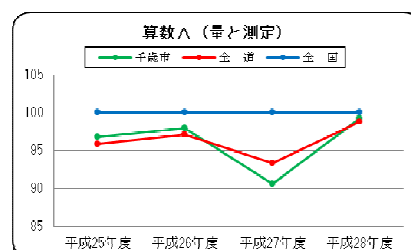
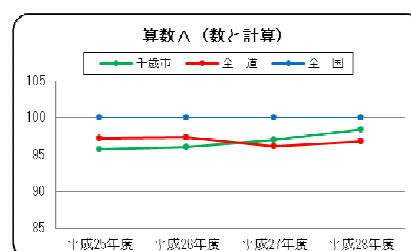


「数と計算」「量と測定」の正答率は、全国と同様であるが、「図形」「数量関係」の正答率は、全国との差が拡大した。

「数と計算」の正答率は、3年連続伸びており全国と同様となっている。「量と測定」についても、大きな伸びが見られる。伸びた要因としては、これまで苦手としていた単位量あたりの大きさ（人口密度）を求める問題の正答率が高かったことが挙げられる。

一方、「図形」については、直方体の面と面の位置関係の理解が、「数量関係」では、基準量と比較量、割合の関係の理解に課題が見られる。

基準量と比較量、割合の関係に関する問題は、過去何度も出題されており、国立教育政策研究所教育課程センターから具体的な指導例も示されている。今後、指導例を参考に、基準量と比較量の関係を捉えたり、割合のおよその大きさを捉えたりすることができるようにする必要がある。

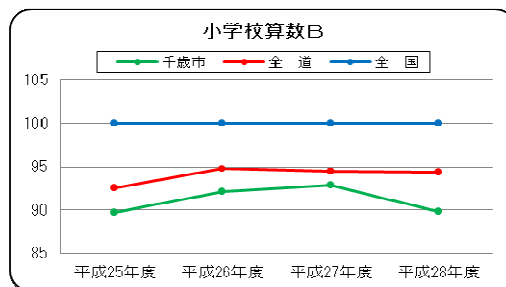


(6) 小学校算数B (主として「活用」に関する問題)

【平均正答率】

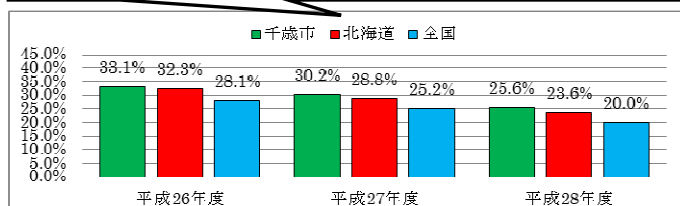
上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
千歳市	52.4 89.7	53.6 92.1	41.8 92.9	42.4 89.8
全道	54.0 92.5	55.2 94.8	42.5 94.4	44.5 94.3
全国	58.4 100	58.2 100	45.0 100	47.2 100

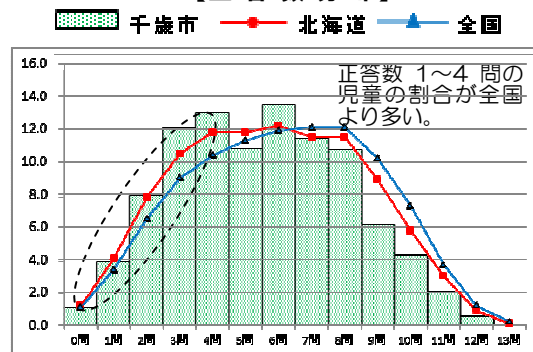


【全国の下位25%と同じ正答率の範囲に含まれる児童の割合】

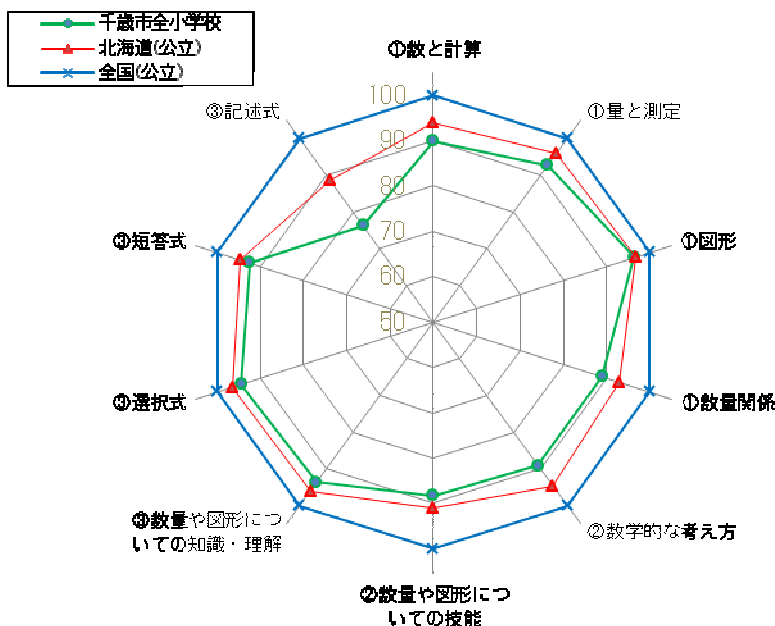
全国の下位約25%の範囲に含まれる児童の割合は減少傾向を示しており、全国との差も縮まってきている。



【正答数分布】

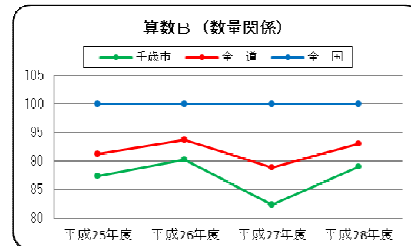
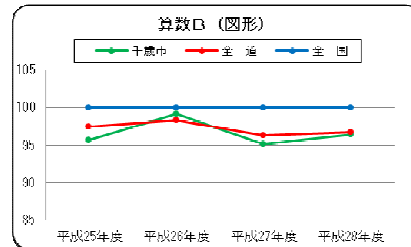
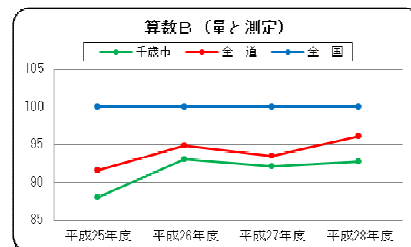
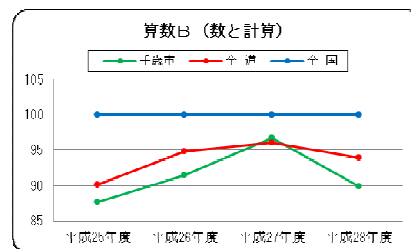


【区別集計結果と領域別正答率の経年変化】



示された式や数値の意味を読み取り、問われていることを言葉や数、式を用いて説明することに課題が見られる。

B問題における「数と計算」に関する力は、問題場面から式をつくり、その式に数値を当てはめて計算し、正しい答えを求めるなど、総合的な力が求められる。図形についても、三角形の内角の和が 180° というような図形の性質に着目して論理的に考察できる力が求められる。このため、一つの場面を表現した複数の式について解釈し合ったり、数や式を用いて理由を説明し合ったりする学習の場を意図的に設定することが大切である。また、平行、垂直、中心、半径、直径など、算数で学習した用語を使うことで、共通に理解できることのよさを実感させ使いこなせるようにしていくことが大切である。



(7) 中学校国語 A (主として「知識」に関する問題)

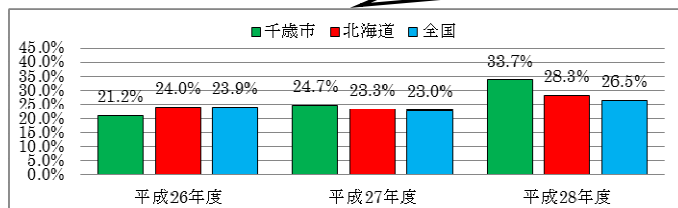
【平均正答率】

上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

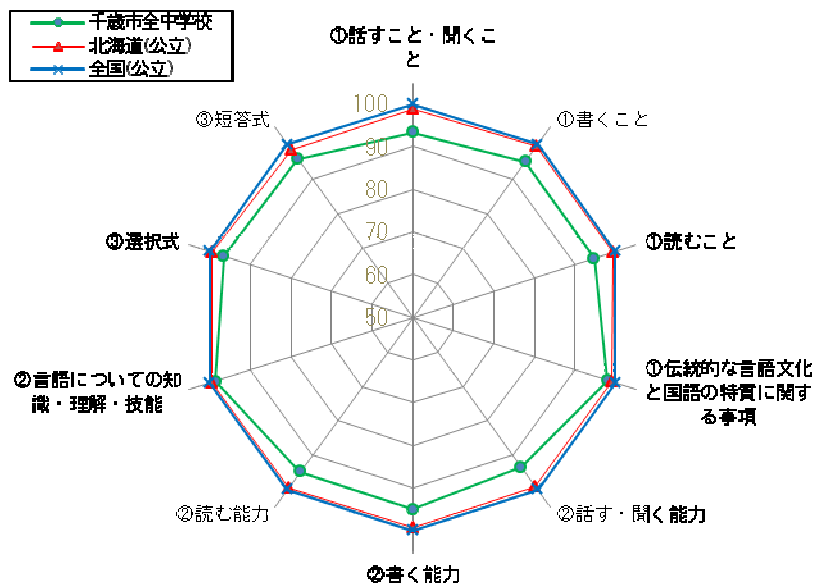
	平成 2 5 年度	平成 2 6 年度	平成 2 7 年度	平成 2 8 年度
千 歳 市	75.8 99.2	80.2 101.0	74.9 98.8	72.8 96.3
全 道	76.0 99.5	79.4 100	75.8 100	75.1 99.3
全 国	76.4 100	79.4 100	75.8 100	75.6 100

【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる児童の割合】

全国の下位約 25%に含まれる生徒の割合は、増加しており、全国の差も拡大している。



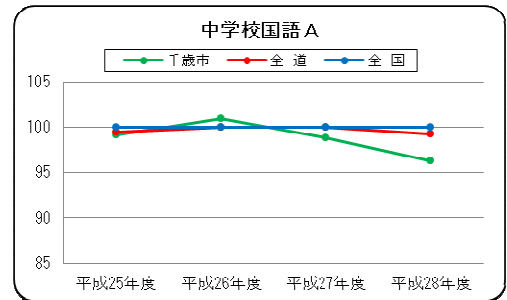
【区別集計結果と領域別正答率の経年変化】



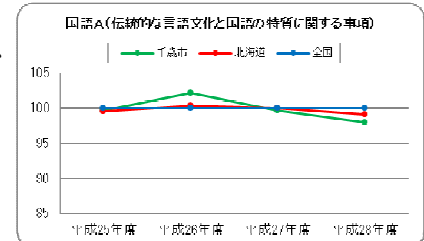
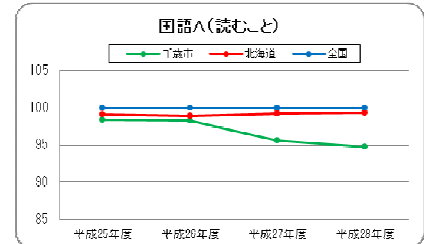
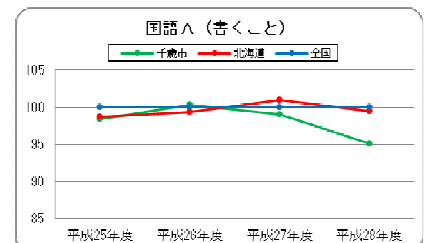
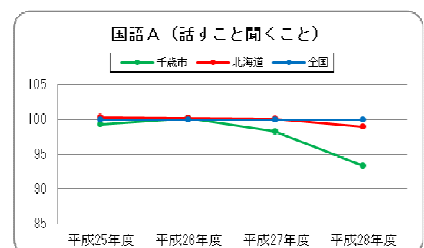
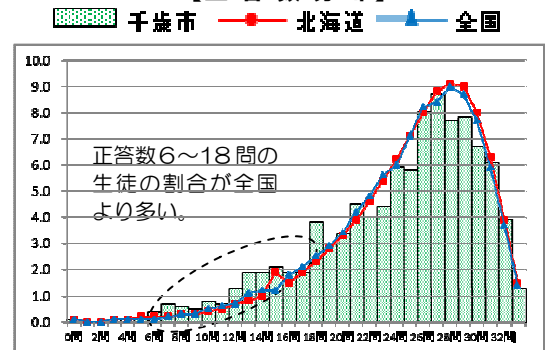
全ての領域において正答率が 3 年連続前年度を下回り、低下傾向が続いている。また、下位層の割合が増加している。

4 領域全てで平成 26 年度を境に前年度を下回る状況が続いており、国語の学力の低下傾向が見られる。特に、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の低下は著しく、全国とは 5 ポイント程度の差が見られる。「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」については、全国との差は 1.2 ポイントである。

今後、全領域について改善に向けた取組の徹底を図る必要があるが、国立教育政策研究所教育課程センターが作成している「全国学力・学習状況調査解説資料」を参考に学習指導要領に示されている各領域の指導事項を生徒に確実に身に付けさせていくことが必要である。



【正答数分布】

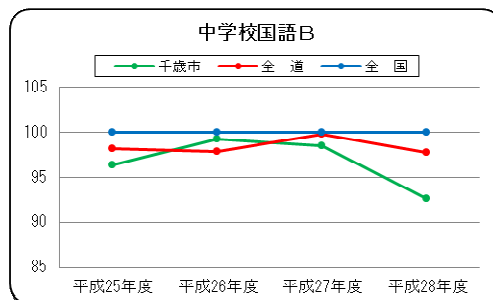


(8) 中学校国語B (主として「活用」に関する問題)

【平均正答率】

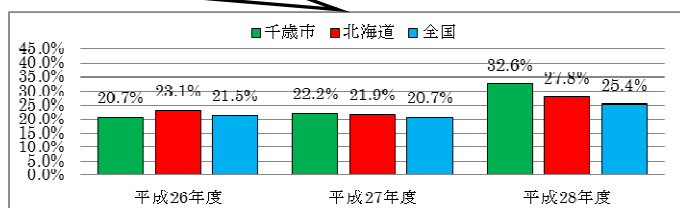
上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

	平成 2 5 年度	平成 2 6 年度	平成 2 7 年度	平成 2 8 年度
千 歳 市	65.0 96.4	50.6 99.2	64.8 98.5	61.6 92.6
全 道	66.2 98.2	49.9 97.8	65.7 99.8	65.0 97.7
全 国	67.4 100	51.0 100	65.8 100	66.5 100

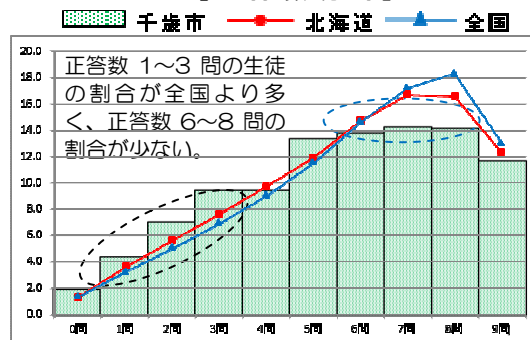


【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる児童の割合】

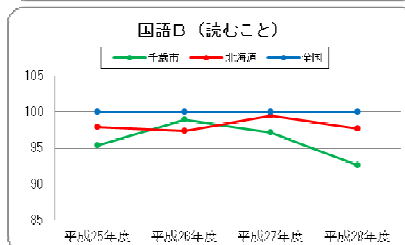
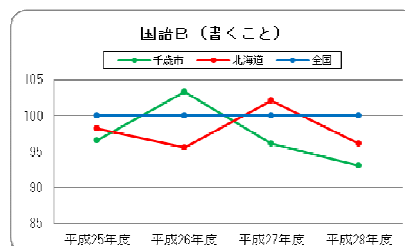
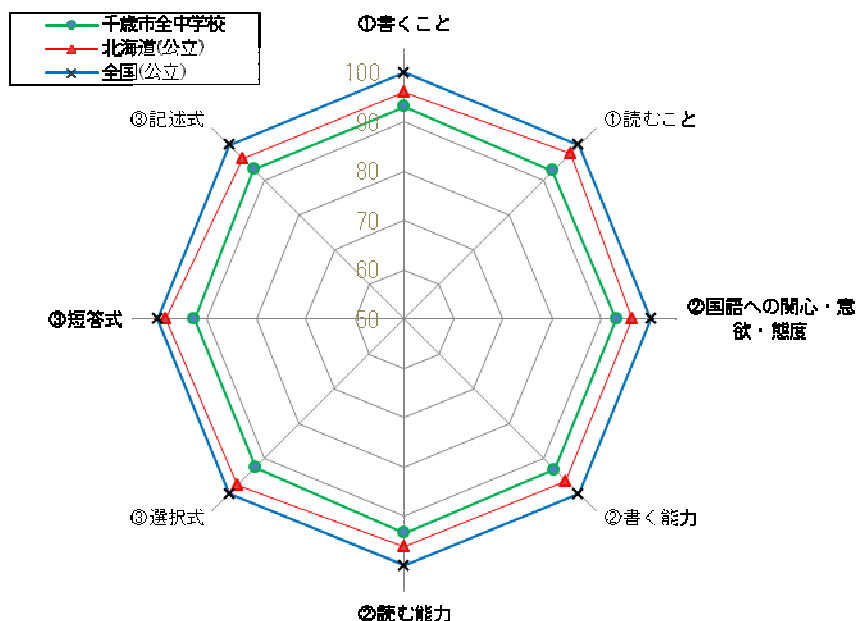
全国の下位約 25%に含まれる生徒の割合は、全国と同様の状況で推移していたが、増加に転じた。



【正 答 数 分 布】



【区分別集計結果と領域別正答率の経年変化】



平成 28 年度は、「話すこと、聞くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域の問題は出題されませんでした。

「書くこと」「読むこと」は、国語 A と同様に平成 26 年度を境に低下傾向が続いている。

「書くこと」については、低下傾向が見られ全国との差は 7 ポイント近くとなっている。条件にしたがって博物館のちらしの表と裏には、どのような表現の工夫があるかを決められた字数の範囲で記述する問題や図鑑の説明を読むことで物語のどの部分についてよくわかるようになったかを記述する問題の正答率が低く課題が見られる。また、この 2 つの問題の無解答率は、全国と比べて、5 ポイント以上高く、記述式問題を苦手としている状況が見られる。「読むこと」についても低下傾向が見られ、文章と資料を関連付けて読み、必要な情報を読み取ることや、場面の展開を叙述に即して捉えることに課題が見られる。

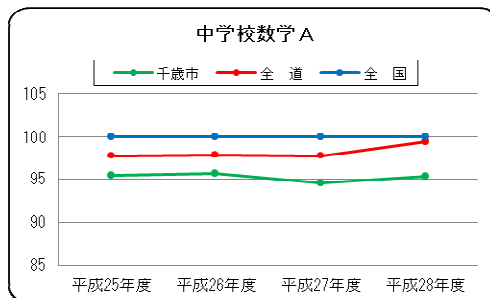
今後、文章の展開に即して内容を的確に捉える能力や、目的に応じて文章を要約する能力、複数の文章を関連付けながら読む能力を高めていくことが必要である。

(9) 中学校数学 A (主として「知識」に関する問題)

【平均正答率】

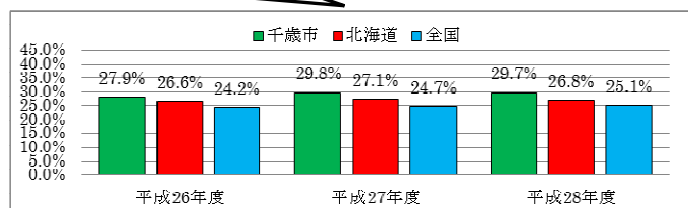
上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
千 歳 市	60.8 95.4	64.5 95.7	60.9 94.6	59.3 95.3
全 道	62.3 97.8	66.0 97.9	63.0 97.8	61.8 99.4
全 国	63.7 100	67.4 100	64.4 100	62.2 100



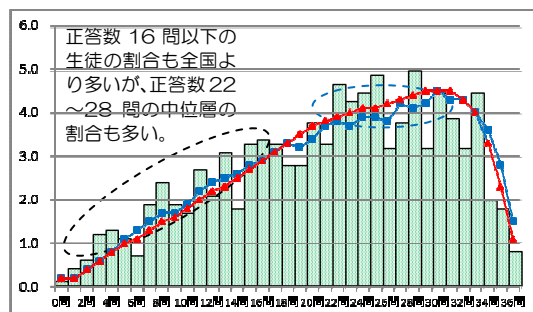
【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる児童の割合】

全国の下位約 25%に含まれる生徒の割合は、ここ 3 年間大きな変化は見られない。

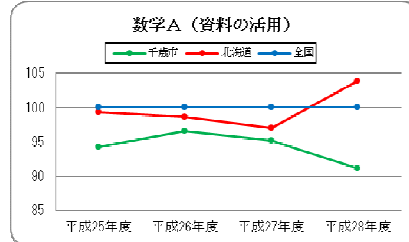
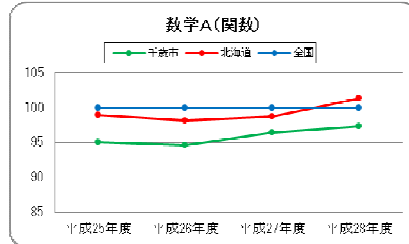
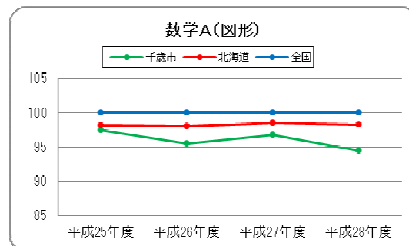
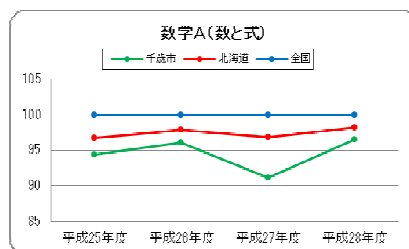
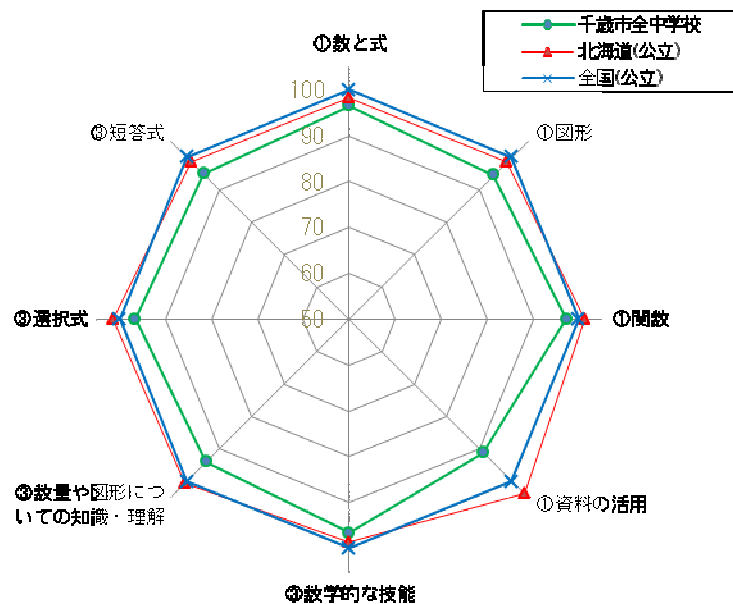


【正 答 数 分 布】

千歳市 北海道 全国



【区分別集計結果と領域別正答率の経年変化】



「数と式」「関数」については、全国平均を下回ったものの、過去 4 年間で最も高い正答率であった。一方、「資料の活用」については、3 年連続前年度を下回り、全国との差が拡大している。

「数と式」及び「関数」については、過去 4 年間で最も高い正答率であり指導の成果が見られる。一方、「図形」については、横ばい状態が続いている。「資料の活用」については、3 年連続前年度を下回り、課題が見られる。

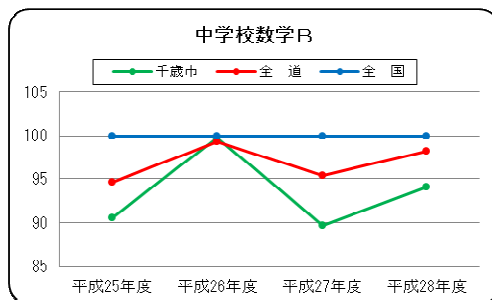
「分数と小数の乗法」「空間における直線と直線の関係」「対称移動した図形の作図」など、各領域で正答率が低い問題は、小学校 A 問題においても正答率の低かった内容であることから、新たな単元に入る前には、その単元の学習に必要な既習事項を振り返らせるなど工夫し、中学校で学習する内容を確実に身に付けさせていくことが必要である。

(10) 中学校数学B (主として「活用」に関する問題)

【平均正答率】

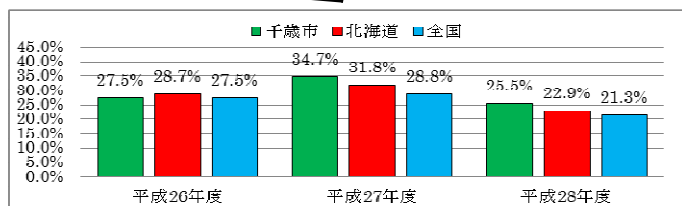
上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

	平成 2 5 年度	平成 2 6 年度	平成 2 7 年度	平成 2 8 年度
千 歳 市	37.6 90.6	59.7 99.8	37.3 89.7	41.5 94.1
全 道	39.1 94.2	59.4 99.3	39.7 95.4	43.3 98.2
全 国	41.5 100	59.8 100	41.6 100	44.1 100

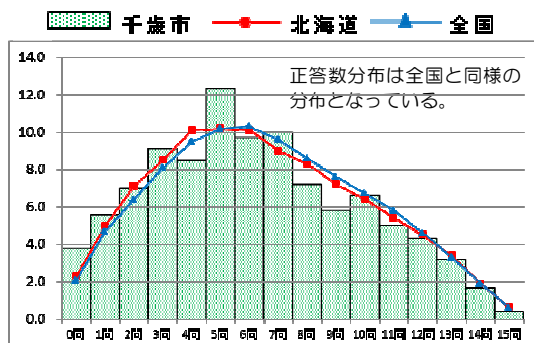


【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる児童の割合】

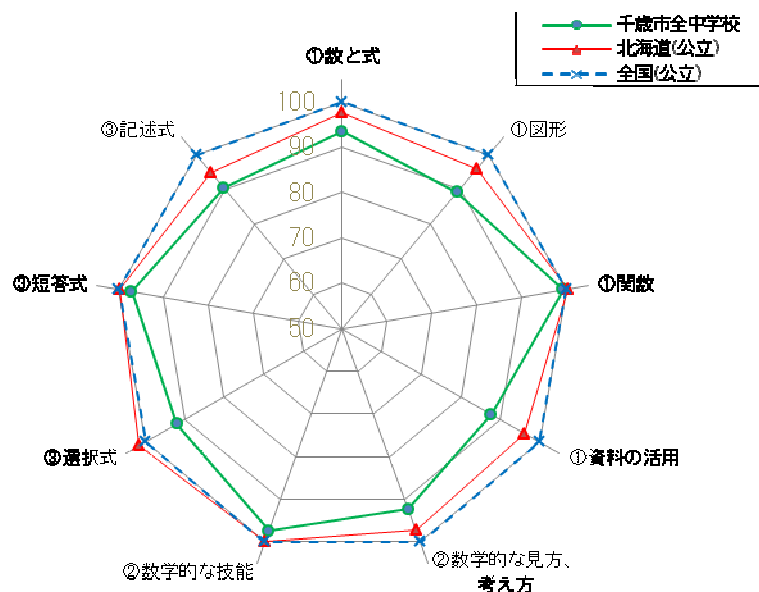
全国の下位約 25%に含まれる生徒の割合は、過去 3 年間で最も低く、全国との差も縮小している。



【正 答 数 分 布】



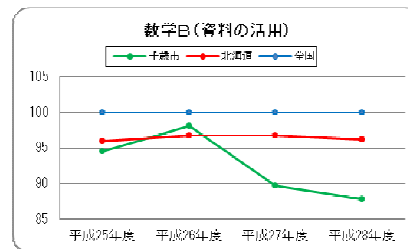
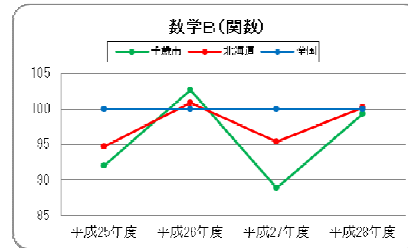
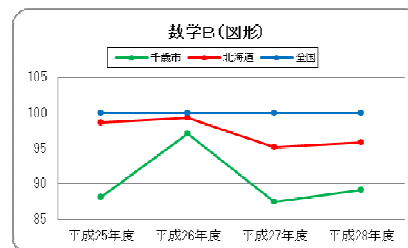
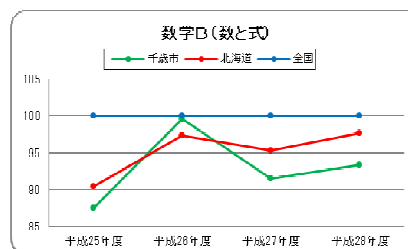
【区別集計結果と領域別正答率の経年変化】



「関数」については、正答率が全国平均まで上昇し回復が見られるが、「数と式」「図形」については、前年度を上回ったものの全国との差は依然として大きい状況が見られる。

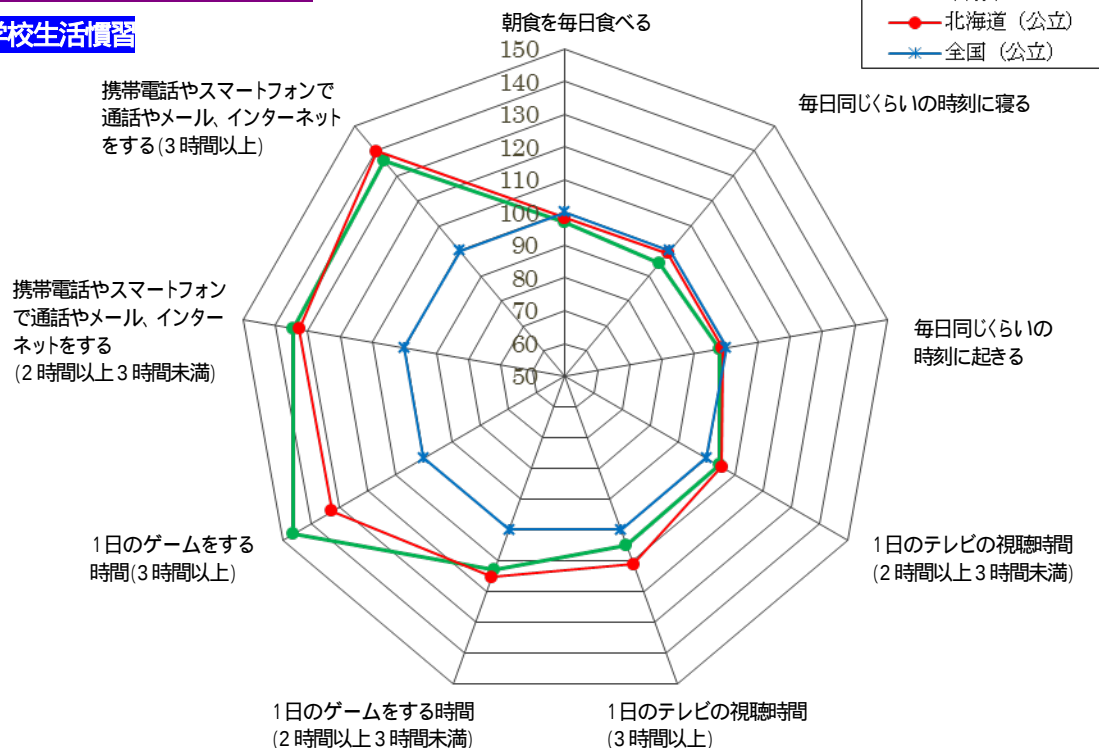
「関数」の正答率は、前年度を大きく上回り、比例・反比例や一次関数の意味、一次関数のグラフの読みに関する問題の正答率は全国と同様であった。「数と式」「図形」「資料の活用」に共通する課題として、ある事柄が成り立つ理由を数学的な表現を用いて説明することが挙げられる。

今後は、数式を根拠に事柄が成り立つ理由を説明する学習活動や資料の傾向を的確に捉えて判断し、その理由を数学的な表現を用いて説明する学習活動を取り入れ、論理的に考える力や数学的な表現を高めていくことが必要である。

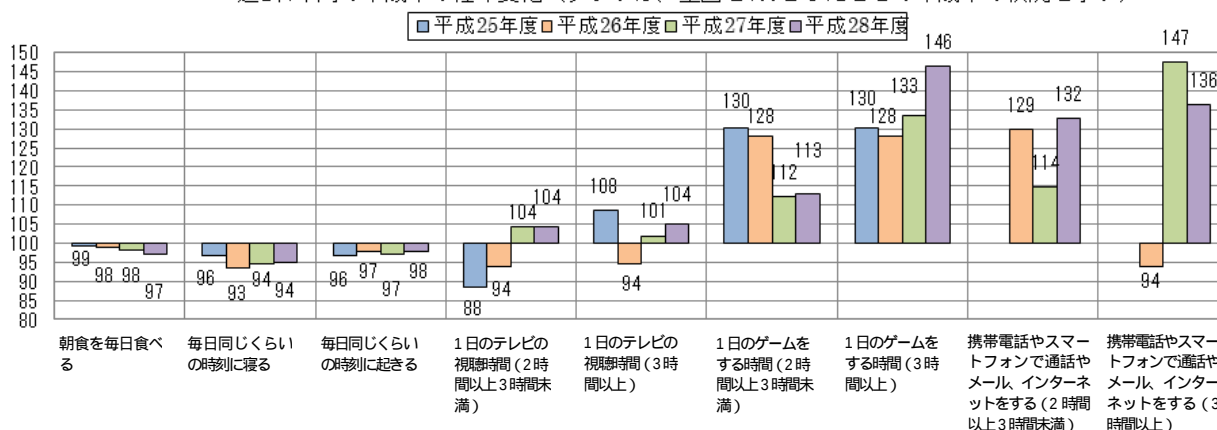


3 児童生徒質問紙の結果

小学校生活習慣



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



朝食を食べない児童がわずかではあるが増加している。また、長時間ゲームをしたり、携帯電話やスマートフォンを使って通話やメール、インターネットをしたりする児童の割合が過去4年間で最も高くなっている。

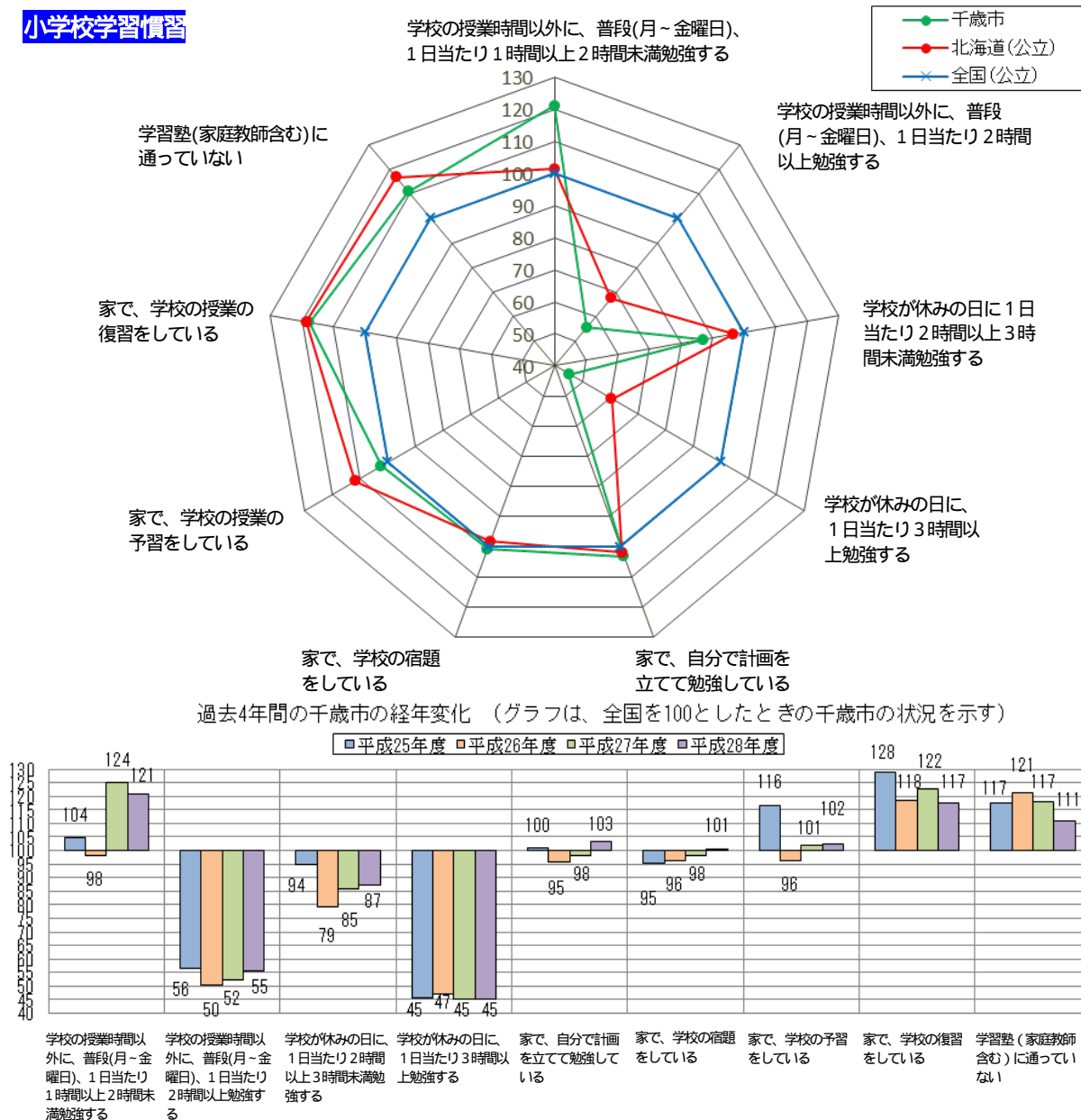
朝食の摂取については、わずかではあるが「食べない」との回答に増加傾向が見られるが、就寝時刻、起床時刻については、改善の兆しが見られる。

テレビの視聴時間については、「2時間以上3時間未満視聴する」と回答した児童の割合は、前年度と同様であるが、「3時間以上視聴する」と回答した児童は、前年度より増加している。

ゲームをする時間についても、長い時間をゲームに費やす状況に歯止めがかからず、全国を大きく上回っている。携帯電話、スマートフォンで通話やメール、インターネットをする時間については、「3時間以上使用している」児童は減少したものの依然として全国を大きく上回る時間を費やしている状況が見られる。

このような状況を改善するために、家庭で「ゲームの時間」や「携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットをする時間」の目安を決めて節度ある利用を身に付けさせることを提言してきているが、千歳市PTA連合会が提唱した「千歳市家庭生活宣言」の内容を再度確認し、PTAと学校が一体となった取組を強化し、児童の「生活習慣の改善」を図っていく必要がある。

小学校学習習慣



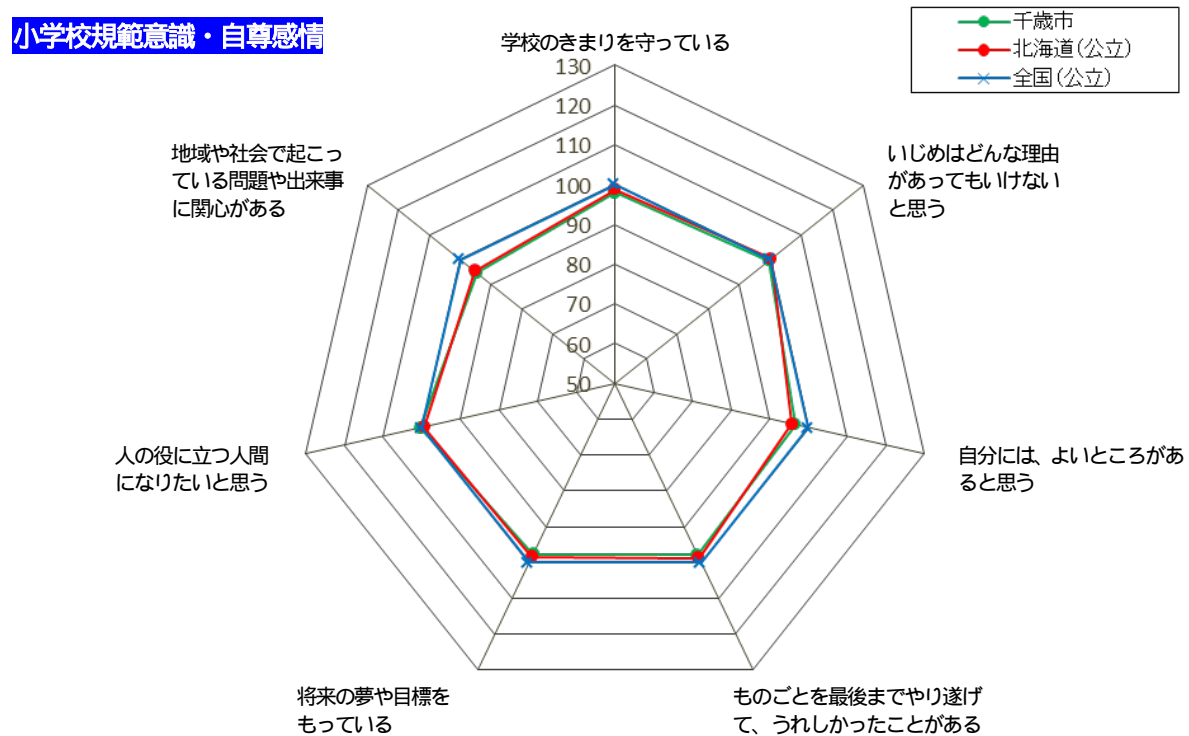
普段、1時間以上2時間未満勉強する児童の割合は、全国を上回っている。また、自分で計画を立て予習や復習、宿題に取り組む児童が着実に増加している状況が見られる。

「普段(月～金曜日)1日あたりに1時間以上2時間未満勉強する」児童は、前年度より減少したが依然として全国を上回っている。また、「2時間以上勉強する」児童は前年度より増加している。一方、「休日に2時間以上3時間未満勉強する」児童は、前年度より増えており、休日における勉強時間は僅かではあるが増加している状況が見られる。学校以外での学習時間については、学習塾に通う児童の割合を考慮する必要があるが、学習塾に通う児童については、増加傾向が見られる。

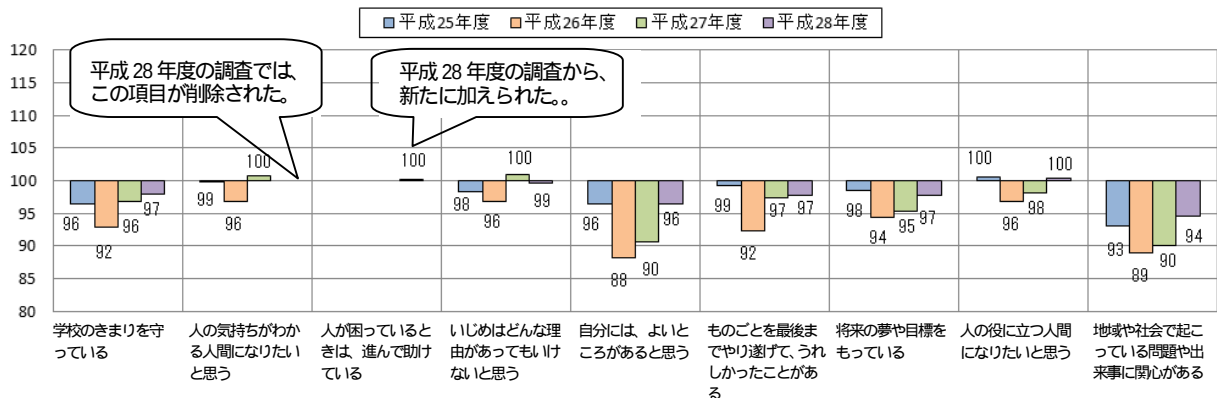
学習に対する関心・意欲・態度については、「自分で計画を立てて勉強している」「家で学校の宿題をしている」「予習をしている」と回答した児童は増加しており、主体的に家庭学習に取り組む児童が増えている。なお、家庭学習の内容としては、これまでと同様に復習中心である。

「普段、1時間以上2時間未満勉強する」児童が全国を上回っていることは、各学校が取り組んできた「学年×10分+10分の家庭学習の取組」の成果と捉えることができるが、1週間の総学習時間は全国を大きく下回っていることから、今後は、週末課題に取り組ませるなど休日の学習を支援する手立てを工夫し、学校以外での学習時間の上積みを図る必要がある。

小学校規範意識・自尊感情



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



児童の規範意識や自尊感情に関する全ての設問において、肯定的な回答の割合が前年度を上回っている。

規範意識については、「学校のきまりを守っている」と回答した児童は、前年度より1ポイント上昇し、過去4年間で最も高く全国と同様となっている。

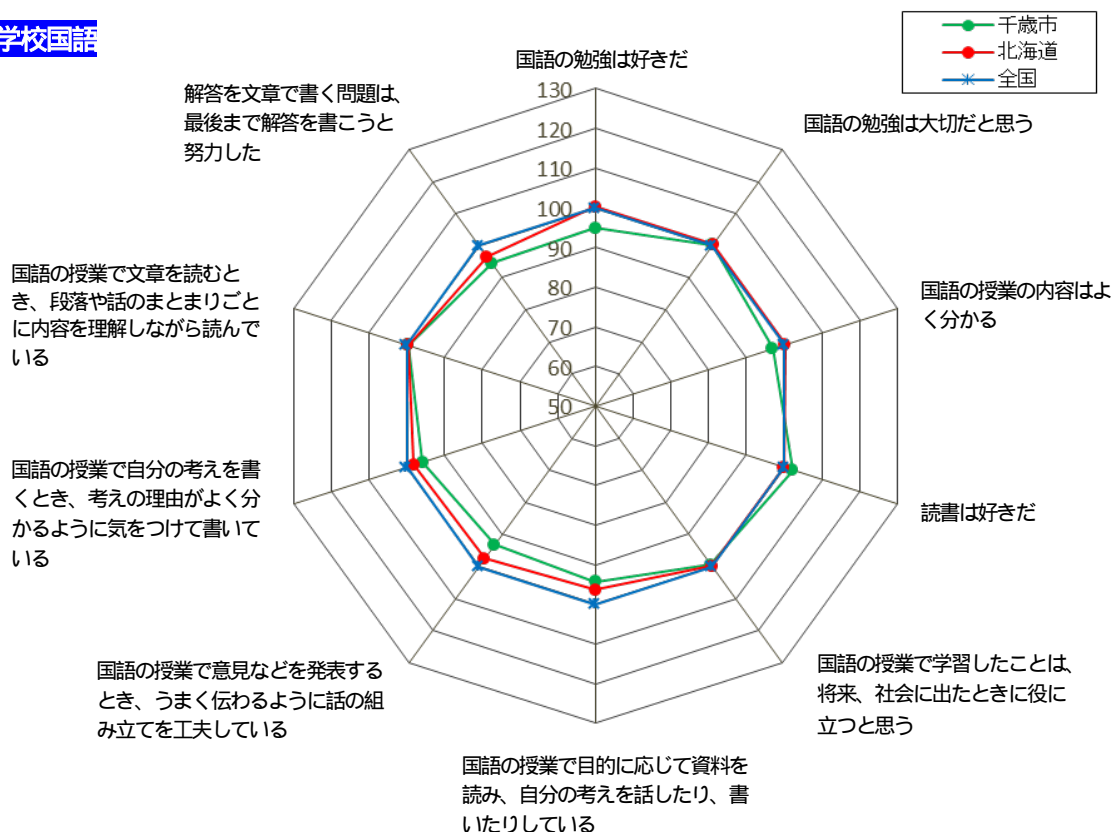
自尊感情については、「自分には、よいところがある」「将来の夢や目標をもっている」と回答した児童も前年度を上回り、全国との差は縮まっている。

地域との関わりについては、本年度は「地域や社会をよくするために何をすべきか考えていますか」という設問が無くなり、経年比較ができないことから、「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか。」という質問の経年変化を用いて実態を分析することにした。この質問の肯定的な回答の割合については、上昇傾向が見られ、地域や社会へ目を向ける児童が増加している状況が見られる。

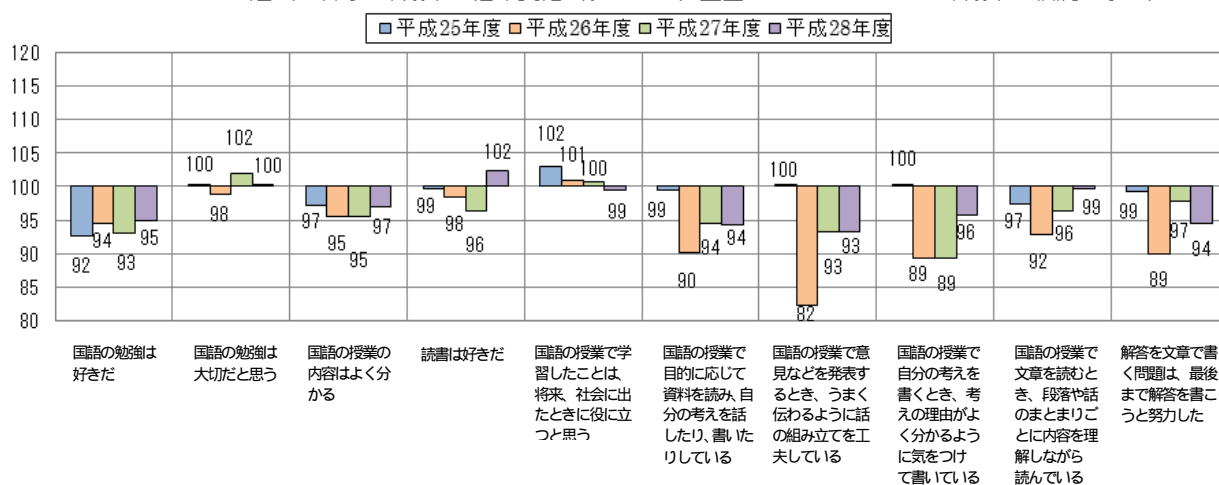
他者理解については、「いじめはどんな理由があってもいけないと思う」と回答した児童は、1.3ポイント下がり、全国を僅かに下回った。また「人の気持ちがわかる人間になりたいと思いますか」という質問については、本年度「人が困っているときは、進んで助けていますか」と、情意面から行動面を見る質問に差し替えられた。情意面でも他者理解を大切にしている児童が多かったが、行動面でも他者を助けると回答した児童が多く、全国を上回った。

今後、各学校においては、ハイパーQU 検査等を有効に活用し、学級集団の状況を的確に把握しながら、学級満足度を高める学級経営を推進し、規範意識や自尊感情を一層高めていくとともに、いじめはどんな理由があってもいけない行為であることを理解させていくことが必要である。

小学校国語



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



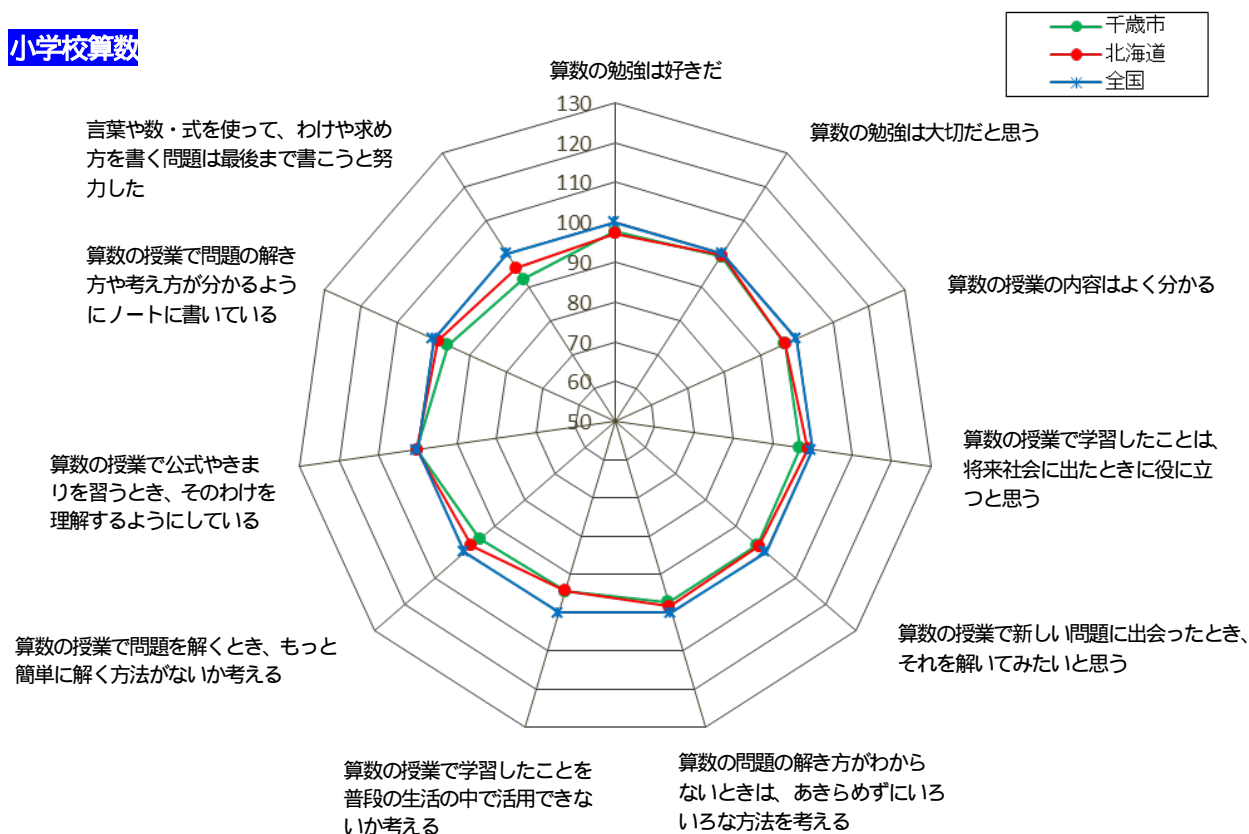
国語好きの児童の割合が過去4年間で最も高く、書く、読む力を伸ばす学び方が身に付いてきている。

国語に対する関心・意欲・態度に関しては、「国語の勉強が好き」と回答した児童の割合は、過去4年間で最も高く、「国語の授業の内容は、よく分かる」と回答した児童の割合についても、前年度より1.5ポイント高かったが、依然として全国を下回っている。また、「国語の勉強は大切だと思う」「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」と回答した児童は、全国と同様となっており、「読書が好き」と回答した児童は、102.3ポイントと過去4年間で最も高かった。

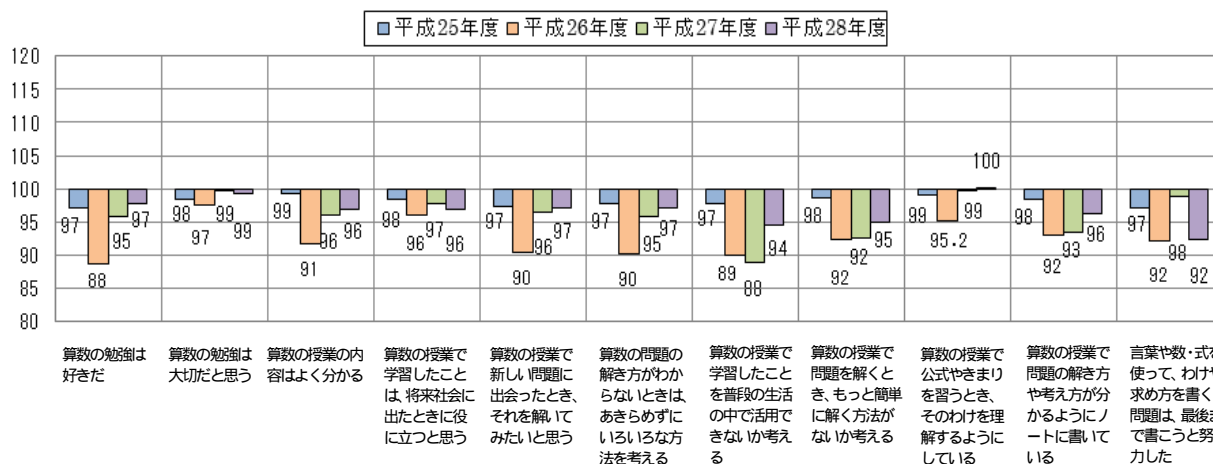
国語の学び方については、「目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている」「発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している」と回答した児童の割合は前年度同様であったが、「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由がより分かるように気をつけて書いている」「文章を読むとき、段落や話のまとまりごとに内容を理解しながら読んでいる」と回答した児童は、前年度より増加しており、国語の学び方が徐々に身に付いてきている状況が見られる。

今後も、デジタル教科書や学校図書館を積極的に活用し、国語の授業に対する興味・関心・意欲を高めるとともに、話す・聞く、書く、読む力を伸ばす学び方を身に付けさせていく必要がある。

小学校算数



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



算数好きの児童や授業内容を理解できている児童が増加し、算数の学び方についても、改善が見られる。

算数に対する関心・意欲・態度に関しては、「算数が好き」「授業の内容がよく分かる」と回答した児童は、3年連続増加し、算数好きの児童や授業内容を理解できている児童が増加している。

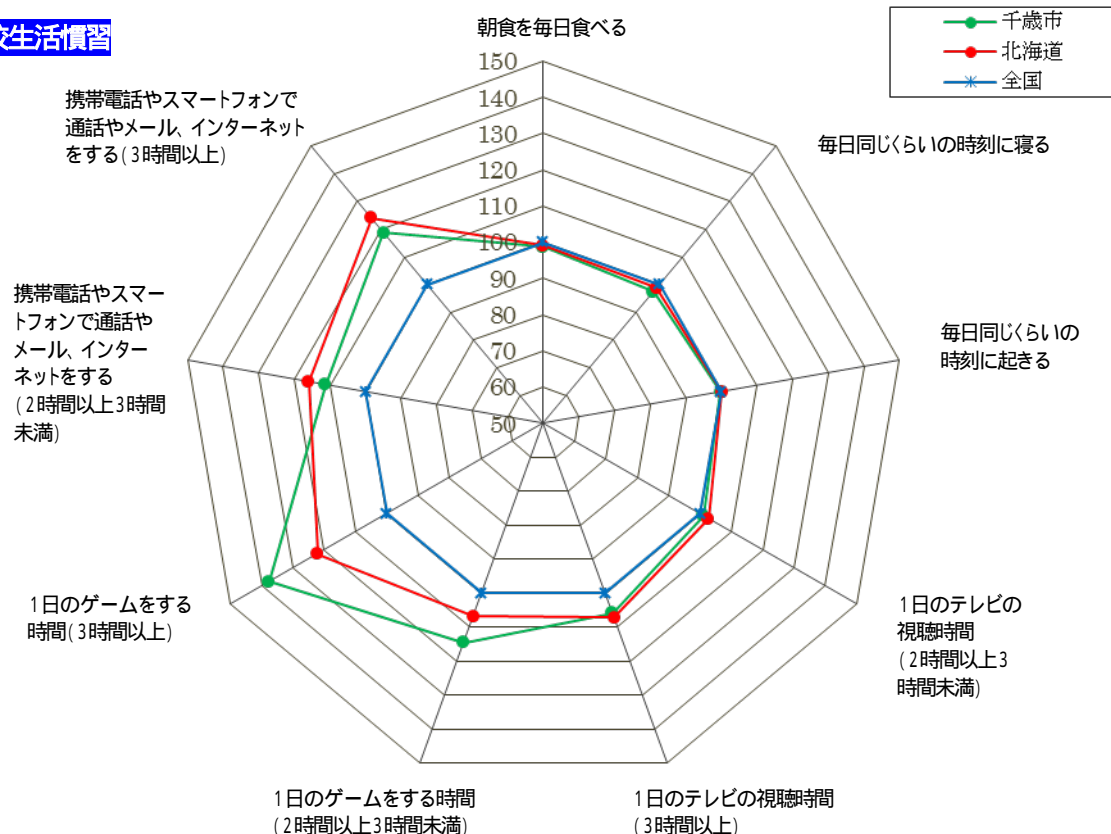
しかし、「算数の勉強は大切だと思う」「算数の授業で学習したことは、将来社会に出たときに役に立つと思う」と回答した児童は、前年度を僅かではあるが下回っており、算数の有用性をあまり感じていない児童が増えている。

算数の学び方については、「公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている」「算数の問題の解き方がわからないときは、あきらめずにいろいろな方法を考える」「問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている」など、数学的な考え方を高める学び方の習得については改善が見られる。

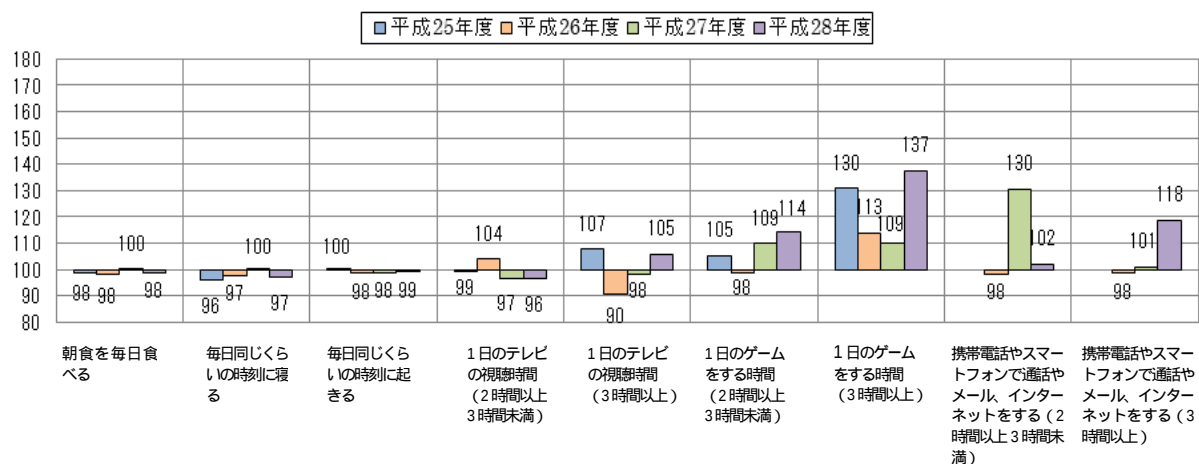
一方、言葉や式を使ってわけや求め方を書くことについては、前年度を大きく下回り課題が見られる。

このような状況は、学習支援員を活用した習熟度別少人数指導や学力向上検討委員会が提言した授業改善の取組の成果と捉えることができる。今後も、デジタル教科書を積極的に活用したり、算数的活動を取り入れた指導を工夫したりして、算数に対する関心・意欲・態度を一層高めていくことが大切である。

中学校生活慣習



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



「早寝、早起き、朝ごはん」の習慣が身に付いているが、ゲームに費やす時間が長く、全国を大きく上回っている。

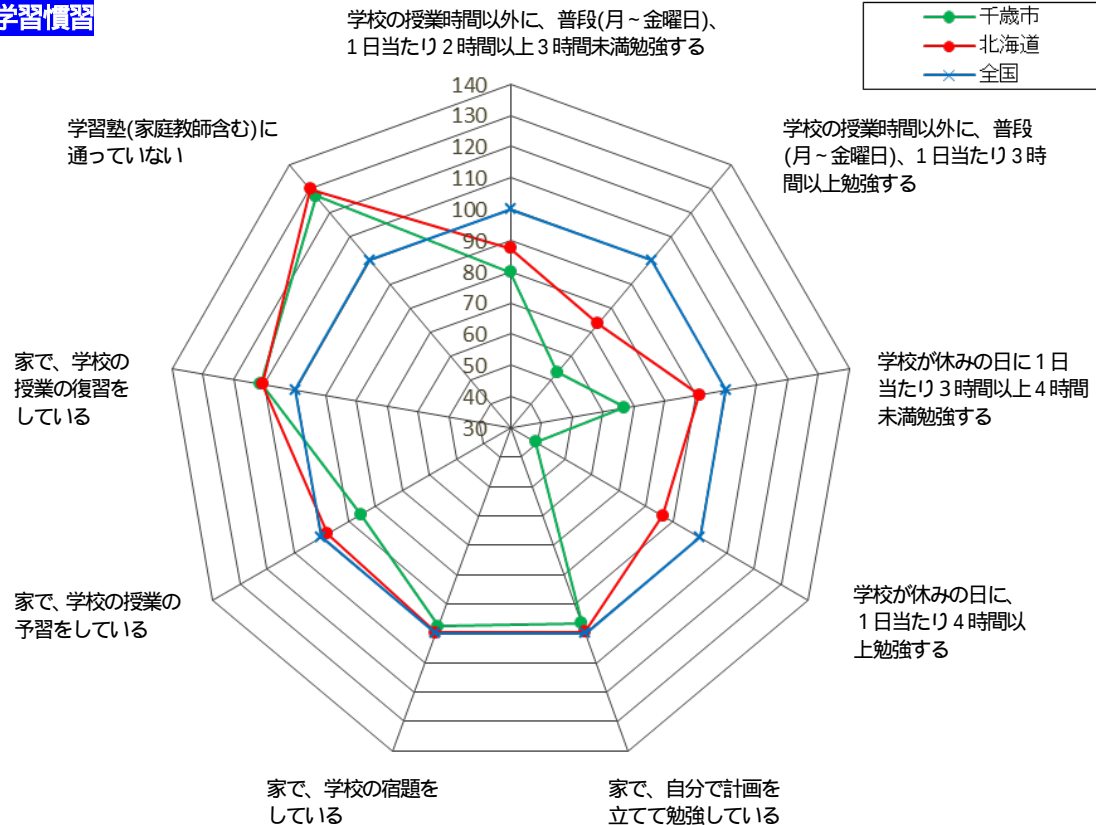
朝食の摂取や就寝時刻、起床時刻については、全国との差はなく「早寝、早起き、朝ごはん」の習慣が身に付いてきている状況が見られるが、テレビの視聴時間については、「2時間以上3時間未満視聴する」は前年度と同様、「3時間以上視聴する」については、前年度を僅かではあるが上回った。

また、ゲームをする時間については、「2時間以上3時間未満ゲームをする」と回答した生徒が僅かに増え、「3時間以上ゲームをする」生徒も減少傾向から一転して大幅な増加に転じた。

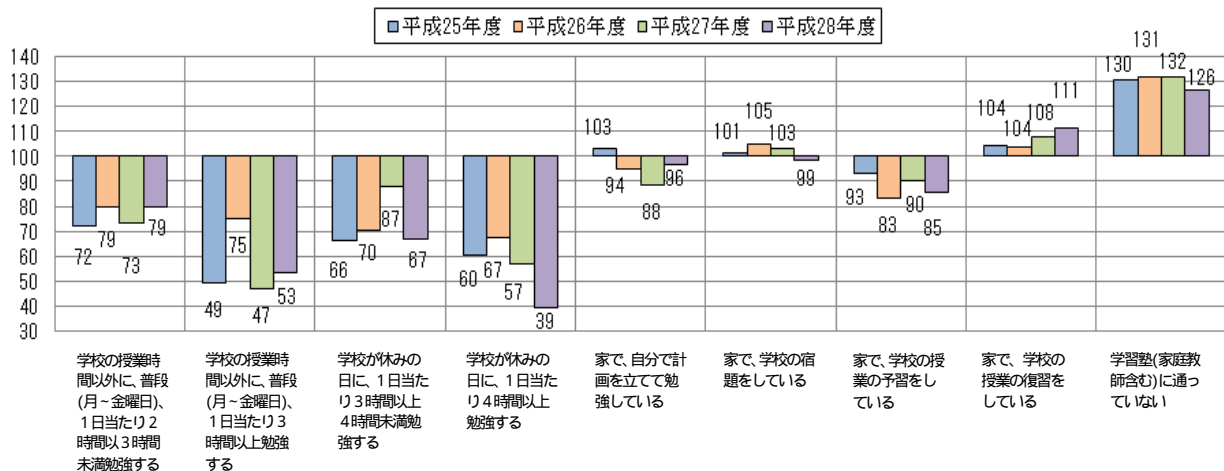
携帯電話やスマートフォンで通話やメール等をする時間については、「2時間以上3時間未満」と回答した生徒の割合は減少したものの、「3時間以上」と回答した生徒が増加している。

多くの中学校では、生徒自身が家庭生活の計画を立て実行できるよう指導してきているが、今後も、指導の成果が生徒の姿として見られるよう、粘り強く学校と家庭が一体となって取組を進めていくことが必要である。

中学校学習慣習



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



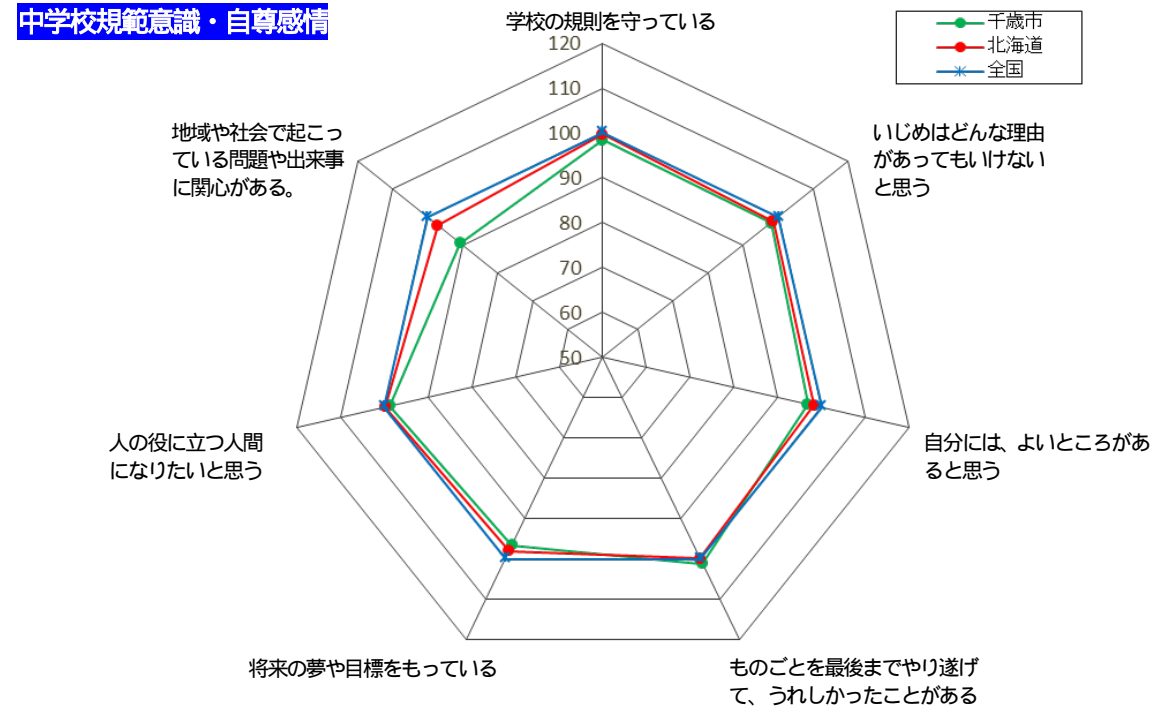
学校が奨励している家庭での学習時間を確保している生徒は増加しているが、1週間あたりの家庭での学習時間は全国と比べて少ない状況が見られる。

家庭での学習時間については、学校が奨励している平日「2時間以上3時間未満勉強する」と回答した生徒の割合は、過去4年間で最も高くなっているが、全国と比較すると少ない状況が続いている。学校が休みの日についても、「3時間以上4時間未満勉強する」と回答した生徒の割合は、全国を大きく下回っており、1週間当たりの家庭での学習時間が少ない状況が見られる。

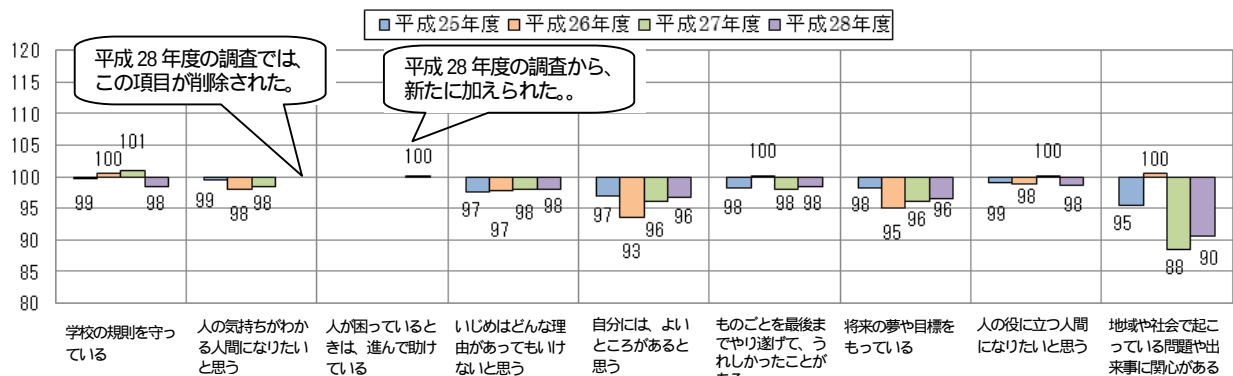
学習に対する関心・意欲・態度に関しては、「自分で計画を立てて勉強している」「学校の宿題をしている」と回答した生徒は、全国と同様の割合となっており、家庭での勉強は、復習中心の勉強となっている。

このような状況から、家庭での学習時間を増やすことが重要な課題であり、宿題や週末課題を提供し確実に取り組ませるとともに、成就感を高める手立てを工夫し、主体的に取り組む態度を育てていくことが必要である。

中学校規範意識・自尊感情



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



規範意識が高く、自尊感情についても高まりが見られる。

規範意識については、「学校の規則を守っている」と回答した生徒の割合は、前年度に比べて1.6ポイント下がったが、依然として高い状況が見られる。

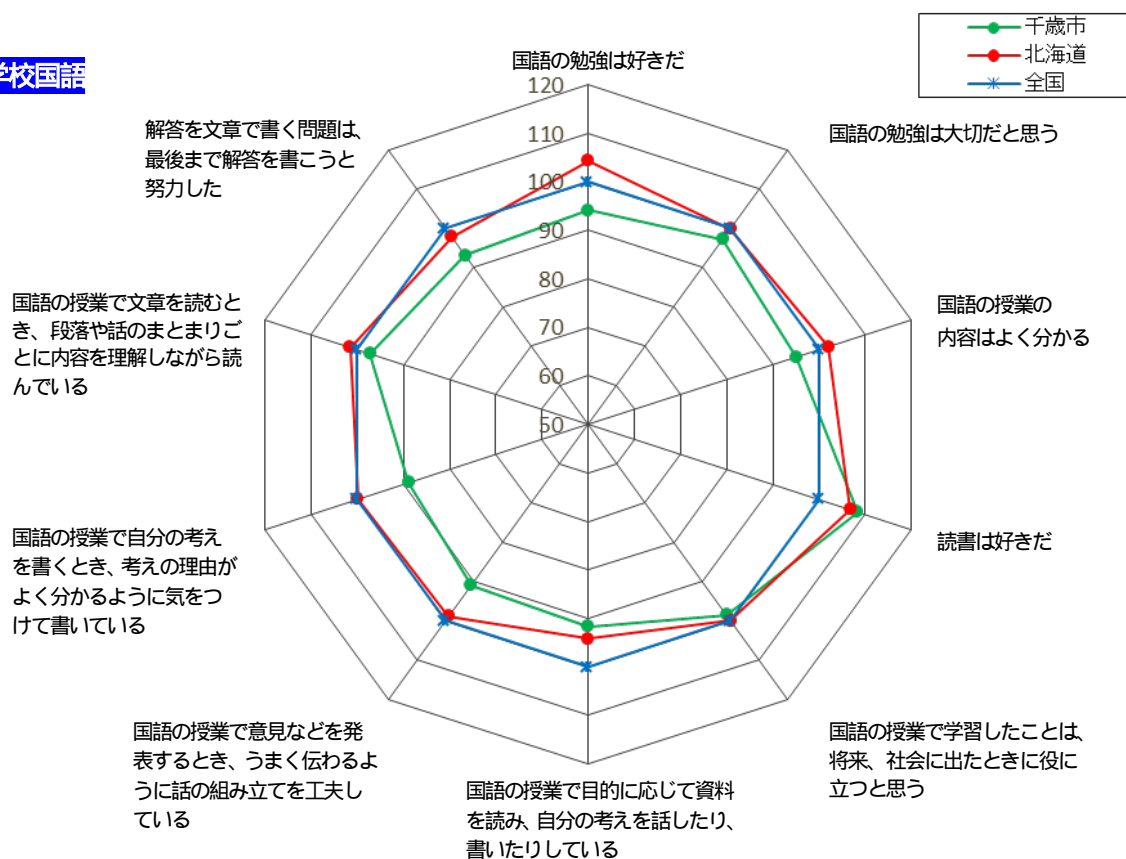
自尊感情については、「自分には、よいところがあると思う」と回答した生徒の割合が、3年連続の増加となっており、各学校の取組の成果ととらえることができる。

地域との関わりについては、「人の役に立つ人間になりたいと思う」と回答した生徒は、前年度を僅かに下回ったものの、過去4年間大きな変化は見られず自己有用感を感じている生徒は全国と同じ割合となっている。本年度は「地域や社会をよくするために何をすべきか考えていますか」という設問が無くなったことから、「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか」という質問の経年変化を用いて実態を分析することにした。この質問の肯定的回答率は、前年度を僅かに上回ったが、全国を下回っており、地域や社会へ目を向け、社会の一員としての自覚をもった生徒の育成に課題がみられる。

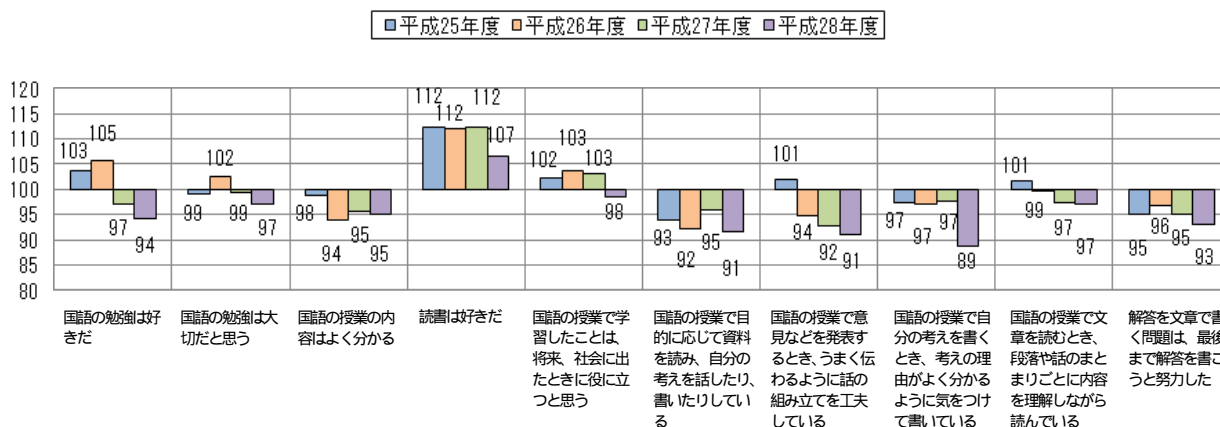
他者理解については、「いじめはどんな理由があってもいけないと思う」と回答した生徒は、過去4年間横ばい状態が続いている。また「人の気持ちがわかる人間になりたいと思いますか」という質問については、本年度「人が困っているときは、進んで助けていますか」と、情意面から行動面を見る質問に差し替えられたが、他者を助けると回答した生徒が多く、全国を上回った。

今後、他者との絆や社会とのつながりを感じ取ったりすることができるボランティア活動や職場体験活動等を通して、自尊感情や自己有用感を一層高めていくとともに、地域の一員としての自覚を高めていく必要がある。

中学校国語



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



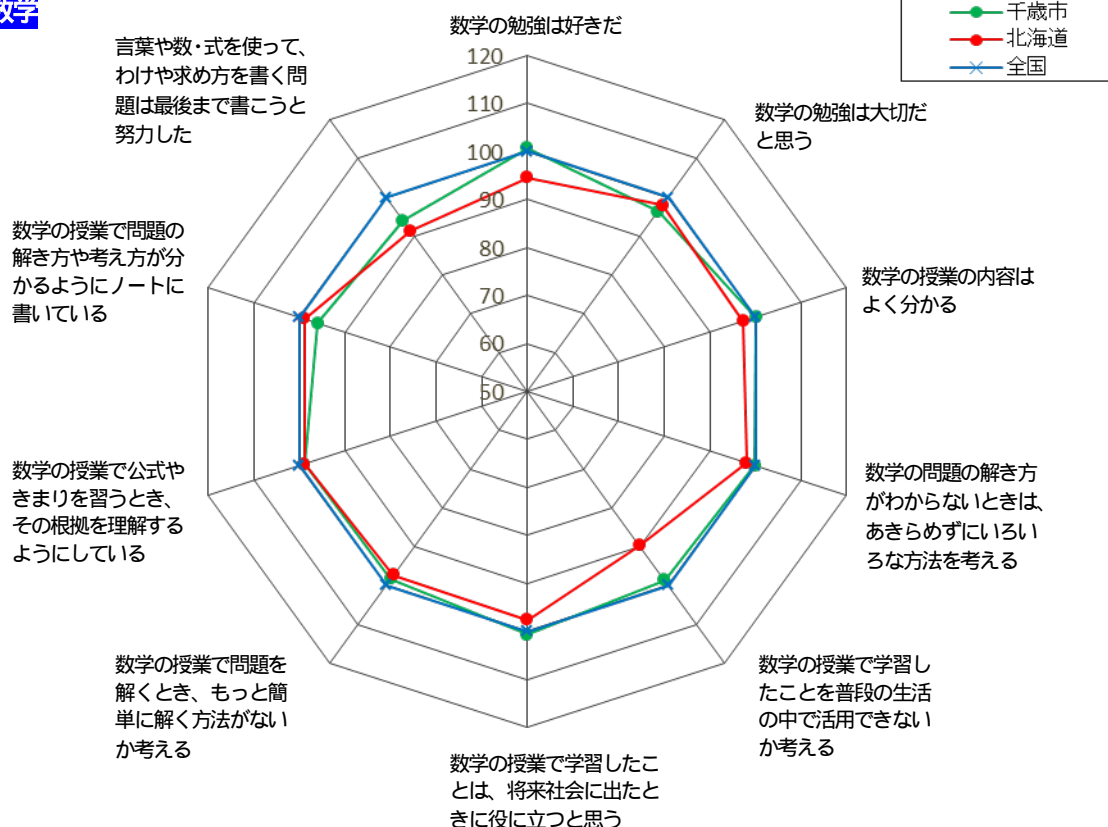
読書意欲は3年連続高い水準が維持されており、「書くこと」に関する関心・意欲の向上が見られる。

国語に対する関心・意欲・態度に関しては、「国語の勉強は好きだ」と回答した生徒の割合は、前年度を3ポイントほど下回り、国語嫌いの生徒の増加傾向が見られる。「国語の授業の内容はよく分かる」と回答した生徒の割合についても、過去3年間横ばい状態が続いており、改善の兆しは見られない。読書に関しては、前年度より4ポイントほど低下したが4年連続全国を上回っており、生徒の読書好きの傾向が維持されている。

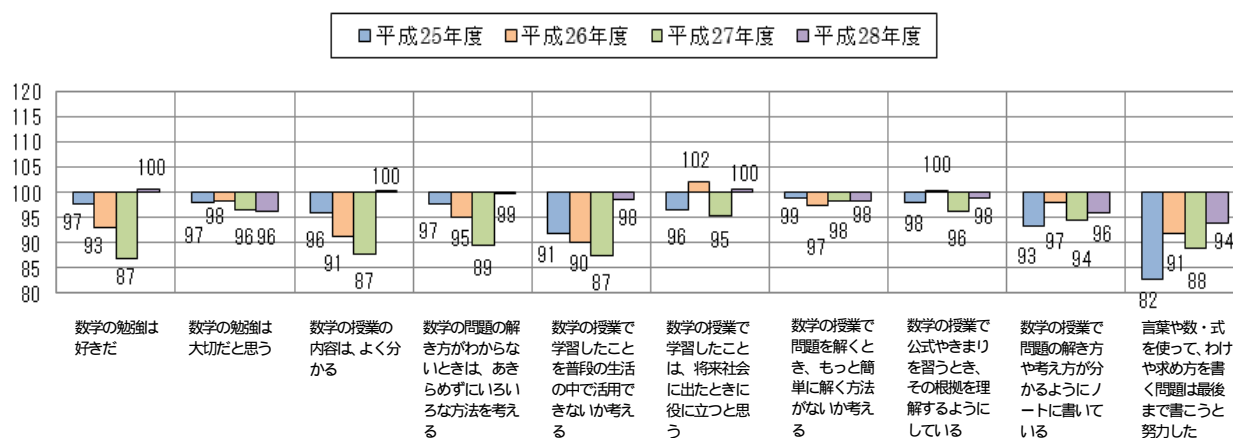
国語の学び方については、全ての質問項目について前年度を下回り、特に、「意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している」「自分の考えを書くとき、考えの理由がよく分かるように気をつけて書いている」「目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている」と回答した生徒の割合は、過去4年間で最も低く、話すこと、書くことが苦手な生徒が多い状況が見られる。

今後、学びの基盤となる国語に対する関心・意欲を高めていくことが重要な課題であり、教師が1時間の授業で生徒が追究する課題を示し、生徒が主体的に課題解決に取り組み、この時間で分かったことを全体で確認する課題解決的な学習を積極的に取り入れるなどして、生徒にとって分かる授業となるよう授業改善を進めていくことが必要である。

中学校数学



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



数学好きの生徒や授業の内容を理解できている生徒が大幅に増加している。

数学に対する関心・意欲・態度に関しては、「数学が好き」「数学の授業の内容が分かる」と回答した生徒の割合は、初めて全国を上回り、数学が有用と考えている生徒も大幅に増加している。また、言葉や数・式を使って理由や求め方を書く、いわゆる記述式問題に諦めず取り組もうとしている生徒が増えている状況が見られる。

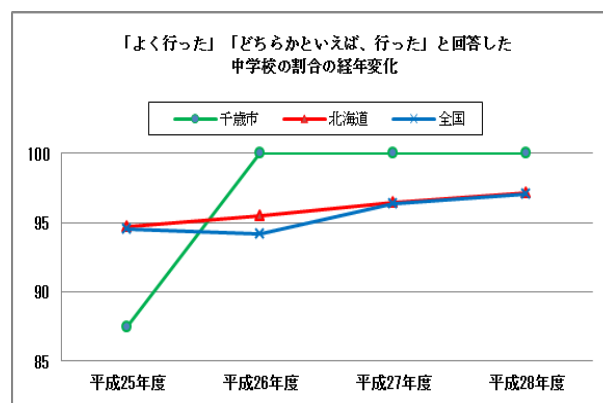
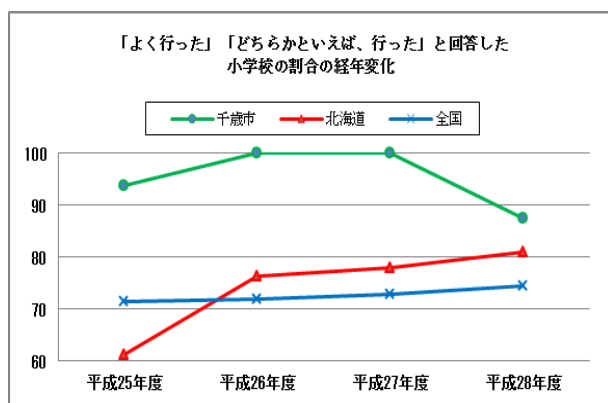
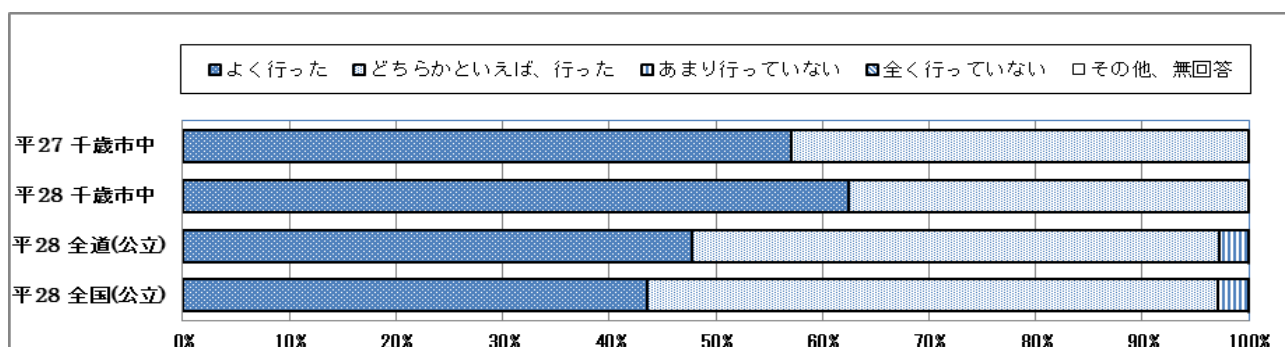
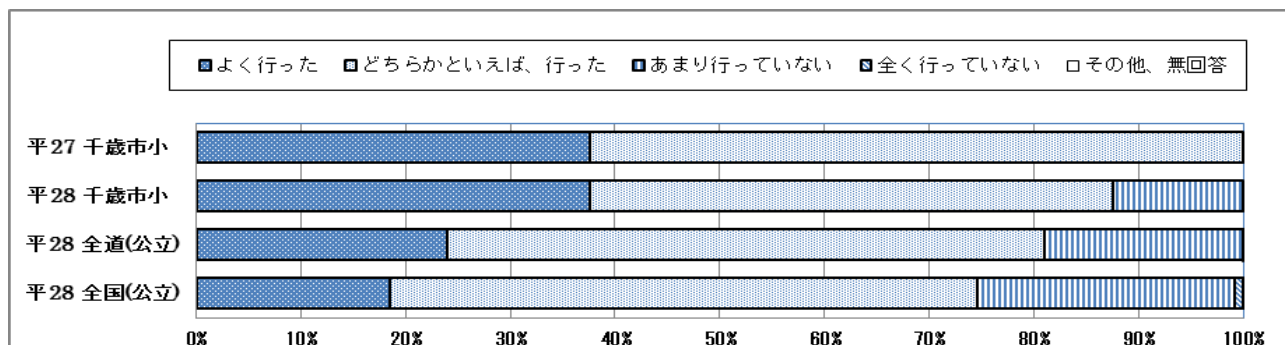
数学の学び方についても、全ての質問項目において改善が見られ、特に、「数学の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考える」「学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える」と回答した生徒の割合の伸びが大きく、授業改善の成果が見られる。

今後も、数学的な活動を積極的に取り入れた授業を工夫し、生徒の数学に対する関心・意欲・態度を一層高め、数学的な考え方を伸ばす学び方を身に付けさせていくことが必要である。

4. 学校質問紙の結果

キャリア教育

質問番号	質問事項
48	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしましたか

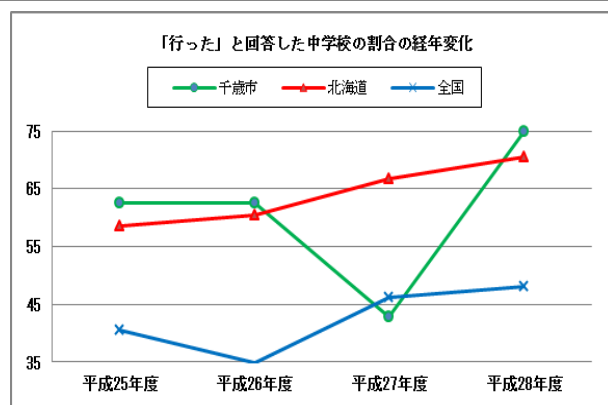
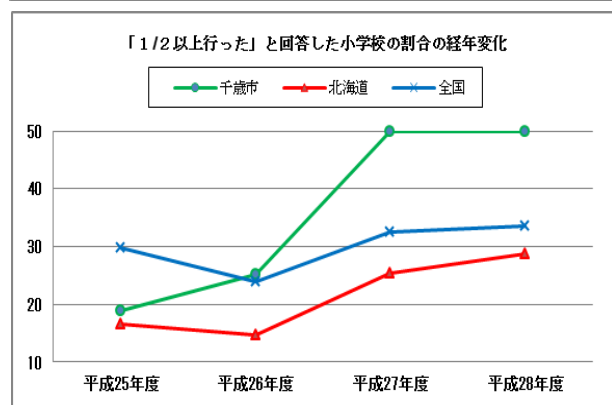
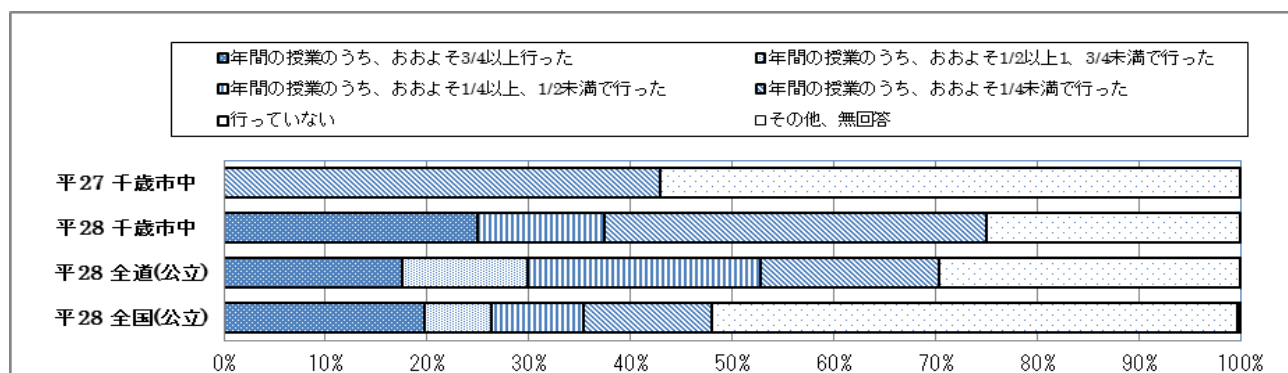
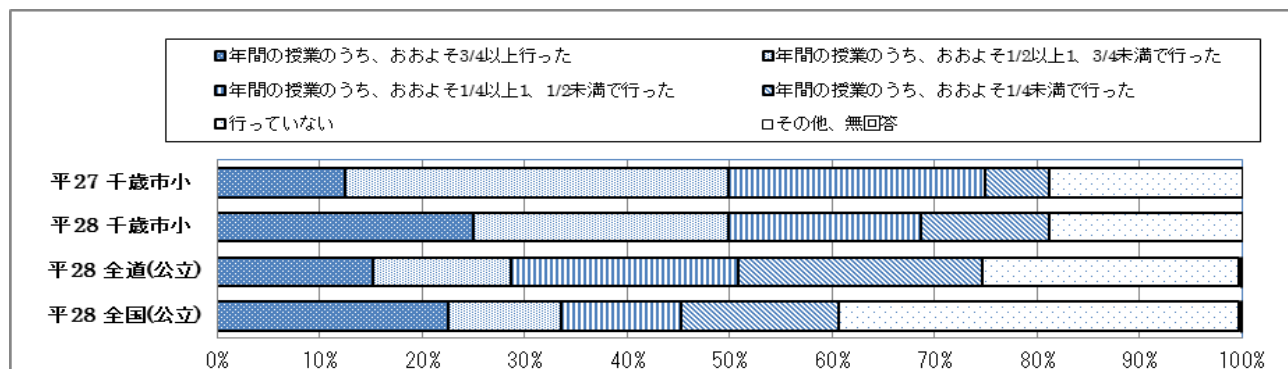


小・中学校ともに全国・全道を上回る取組が行われている。

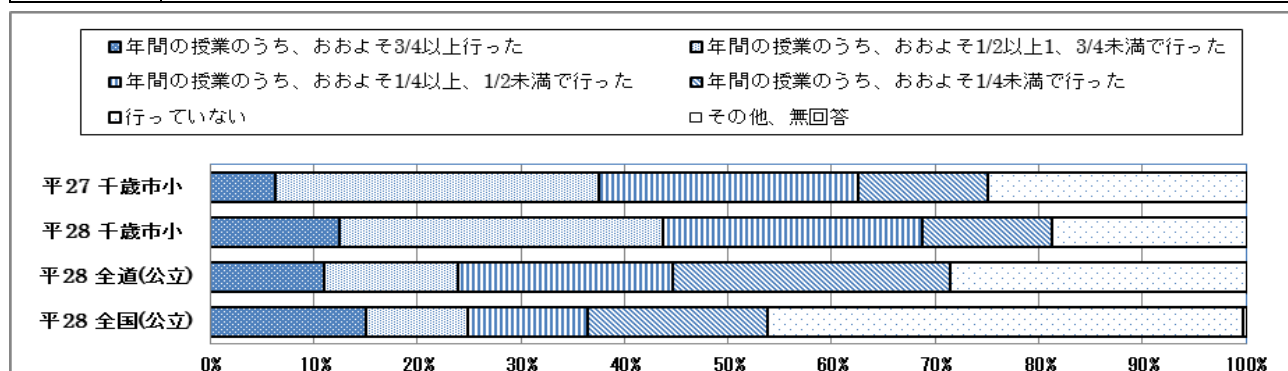
「将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をよく行った」と回答した小学校は、前年度と同様であり、「どちらかといえば行った」と回答した学校が12.5ポイント減少したものの全国・全道を上回る結果となっている。中学校は、「よく行った」と回答した学校が、前年度を5.4ポイント増加し、「どちらかといえば行った」と回答した学校を合わせると100%となっている。児童生徒質問紙において「将来の夢や希望をもっている」と回答した児童生徒は、前年度より小学校では2.4ポイント、中学校では0.6ポイント増加したが、全国を100とした指数で小学校は97.7ポイント、中学校は96.6ポイントであり、夢や希望をもって将来の生き方や生活を考え、前向きに自己の将来を設計する将来設計能力の指導については、一層の充実を図る必要がある。今後は、各学校において、ボランティア活動や地域人材の活用、職場体験学習等の取組や土曜授業日におけるキャリア教育の推進等をととして、社会への視野を広げ、社会人としての自立を目指す積極的な姿勢を育て、夢や目標をもって学校生活を送らせることが必要である。

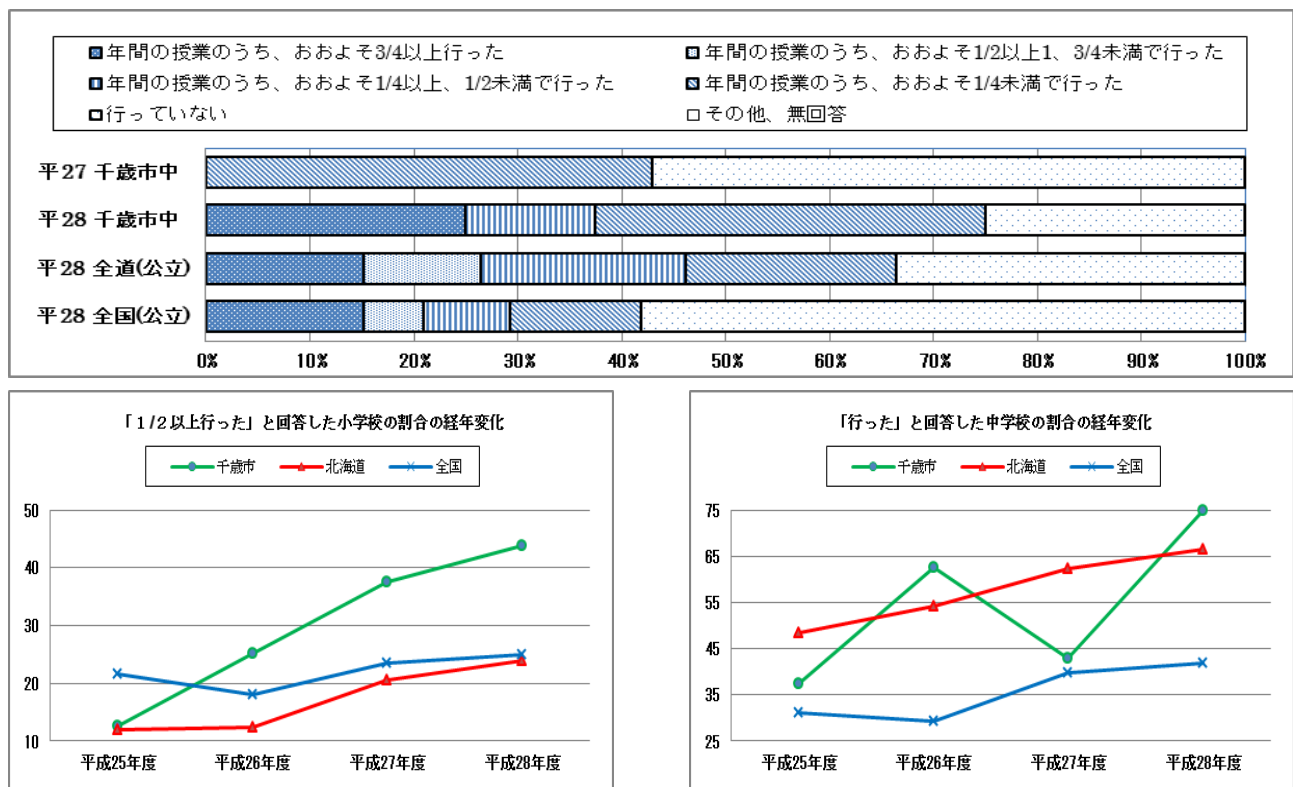
習熟度別少人数指導

質問番号	質問事項
6 4	調査対象学年の児童（生徒）に対して、算数（数学）の授業において、前年度に、習熟の遅いグループに対して少人数による指導を行い、習得できるようにしましたか



質問番号	質問事項
6 5	調査対象学年の児童（生徒）に対して、算数（数学）の授業において、前年度に、習熟の早いグループに対して少人数による指導を行い、発展的な内容を扱いましたか





小・中学校ともに「習熟の遅いグループ」に対しても「習熟の早いグループ」に対しても実施状況が全国を大きく上回る。

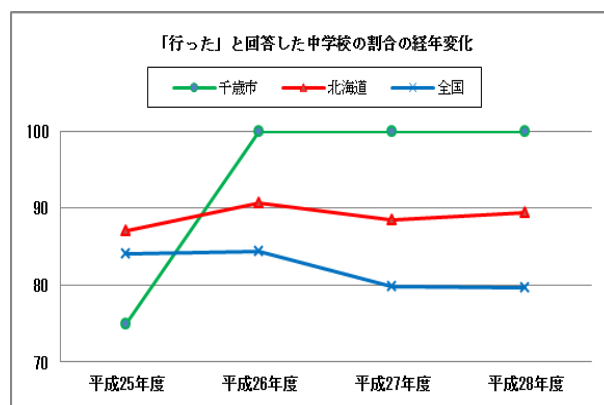
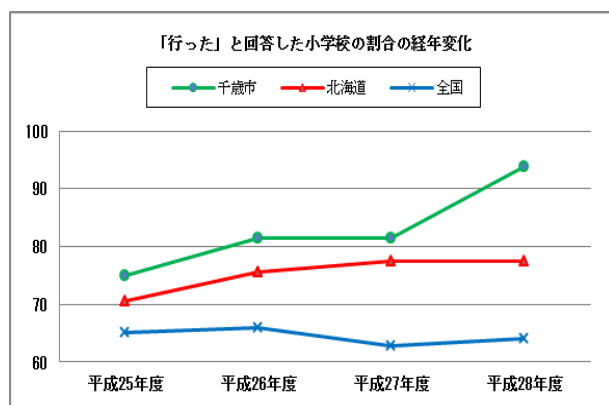
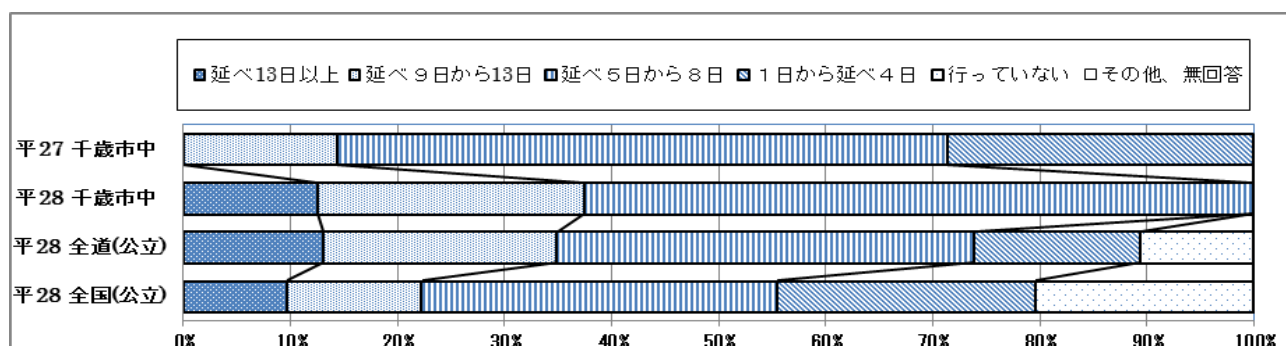
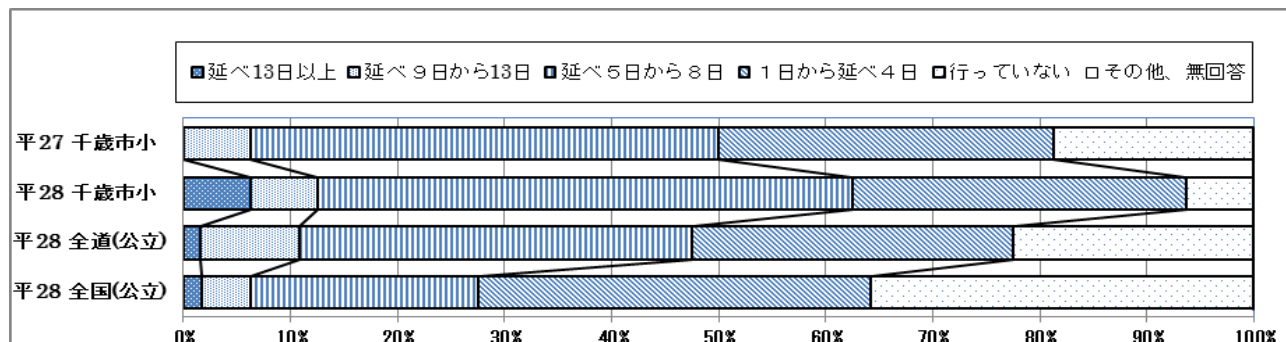
小学校においては、「習熟の遅いグループ」「習熟の早いグループ」とともに年間の授業の二分の一以上で習熟度別少人数指導を行っている割合（遅いグループ：千歳市 50%、全国 33.6%）（早いグループ：千歳市 43.8%、全国 24.9%）が全国に比べてかなり高い。4 か年の経年変化においても、習熟の早いグループに対する指導に大幅な上昇が見られ、市の施策として小学校 13 校に配置している「学習支援員」による取組が進んでいる成果と捉えることができる。今後も両者に対する積極的な対応が求められる。

中学校においては、習熟度別少人数指導の実施状況が昨年度より遅いグループ、早いグループともに 32.1 ポイントと大幅に増加している。生徒質問紙においても、「数学が好き」「数学の授業の内容がわかる」「数学の勉強は大切だと思う」と回答した生徒が、全国を 100 とした指数でそれぞれ 100.7 ポイント、100.1 ポイント、96.4 ポイントであり、ここ 4 年間の経年変化の中でも数学に対する関心・意欲が最も高い結果となり、各学校が校内における指導体制や授業後半に習熟度別の指導を行うなど具体的な工夫に取り組んできた成果ととらえることができる。

今後は、学校種、学校規模に関わらず、個に応じたきめ細かな学習指導を実施し、特に算数・数学の授業において、習熟に対応した少人数指導を行い、学習内容が習得できるよう、「指導方法の工夫改善による加配」や「学習支援員」の配置などを活用して校内体制を整備し、児童・生徒の習熟の程度に応じた指導の一層の充実を図っていくことが必要である。

長期休業中の学習サポート

質問番号	質問事項
27	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度に、長期休業日を利用した補足的な学習サポートを実施しましたか（実施した日数の累計）



中学校においては全ての学校で実施。小学校においても実施校の割合が増加。

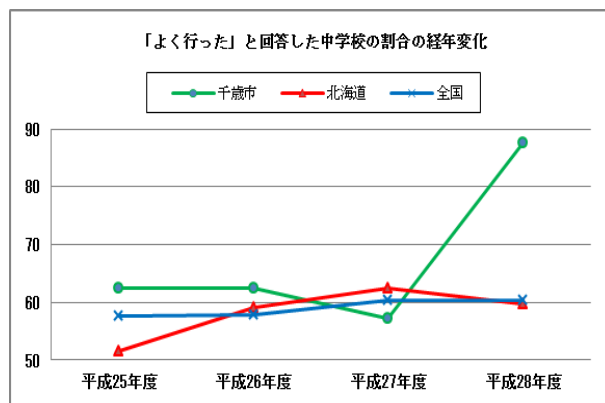
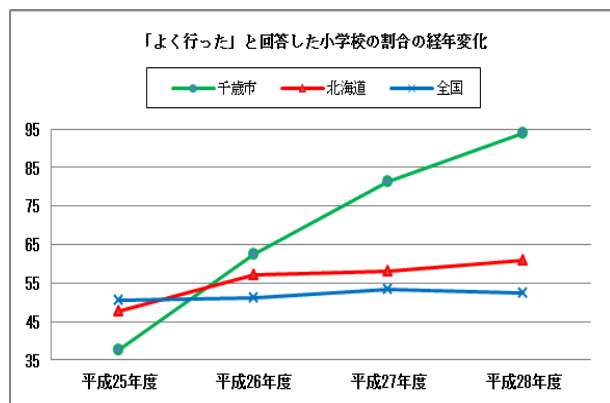
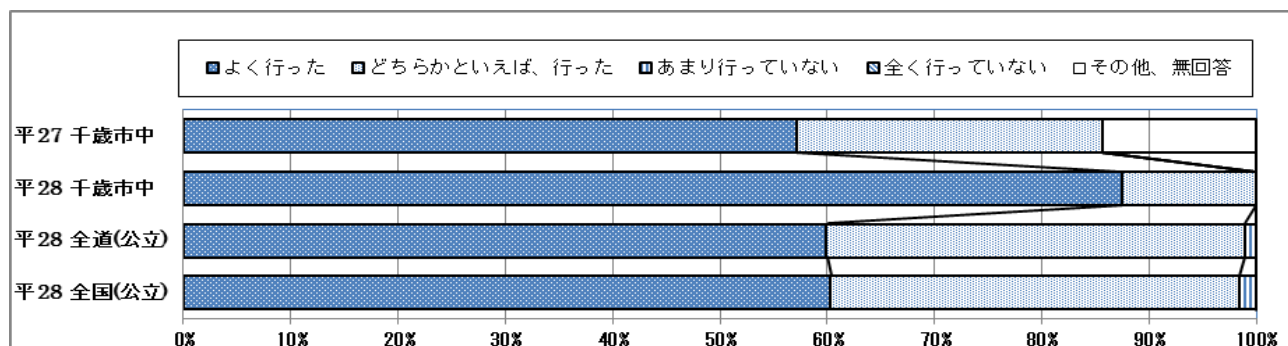
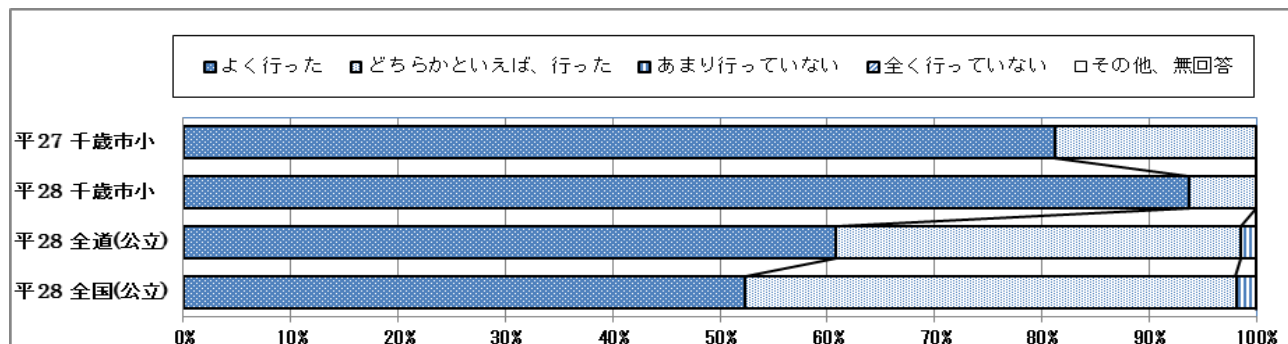
長期休業中の学習サポートを実施している学校は、小学校が12.5ポイント増加し93.7%、中学校は昨年同様100%となっている。

未実施の小規模校では、課業日における個別の指導が容易なことから、日常的に補足的な学習が行われているが、子ども一人一人の教育的ニーズに応え、きめ細かな指導の充実を図る観点からも長期休業中の補足的な学習サポートについて、学校の実情に応じた実施方法を工夫し、取組を進めていく必要がある。

長期休業中の補足的な学習については、千歳科学技術大学の支援を受けてサポート体制を整えているが、小中学校と大学の日程調整等の課題もあることから、今後、大学との連携を含め、実施日数、指導内容、指導体制の充実を図り、補足的な学習はもとより、発展的な学習を含め、長期休業中の学習サポートの質の向上を図る必要がある。

漢字・語句の指導

質問番号	質問事項
72	調査対象学年の児童（生徒）に対する国語の指導として、前年度までに、漢字・語句など基礎的・基本的な事項を定着させる授業を行いましたか



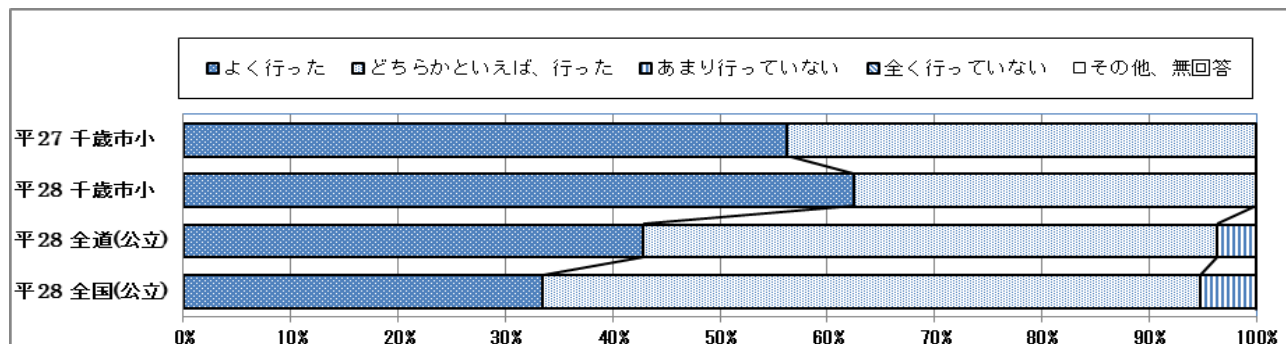
小・中学校ともに積極的な指導が行われている。

「よく行った」と回答した学校は（小 93.8%、中 87.5%）であり、全国（小 52.3%、中 60.3%）と比較しても小・中学校ともに積極的な取組が行われているが、全国学力・学習状況調査の結果を活用して、全国的に定着が不十分な漢字・語句については、誤答を分析し、正しく理解できるよう指導方法を工夫し、確実に身に付けさせていくことが大切である。

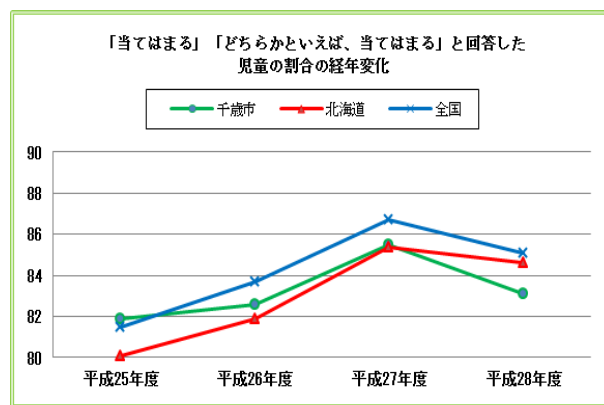
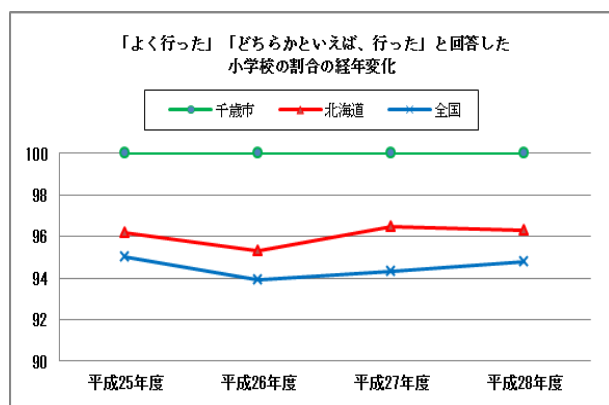
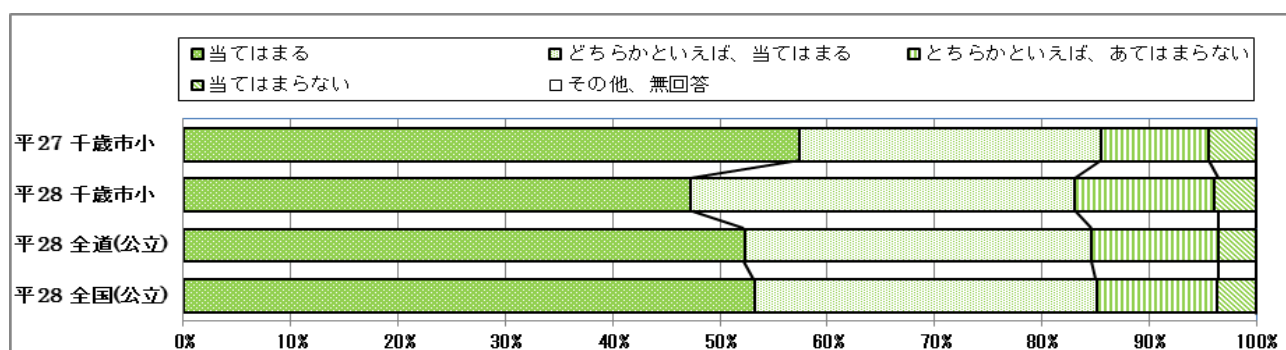
今後は、漢字のもつ意味を考えながら正しく使ったり、同音異義の漢字に注意して使ったりすることができるようにするとともに、国語科以外の学習で使用する漢字をその学年で読み書きできるようにすることも大切である。また、全ての教科でノート指導や発表資料作成等で漢字を使用する場面を意図的に設定することが大切である。

授業に対する教師と児童生徒との意識の違い（＊児童・生徒質問紙の回答と比較）

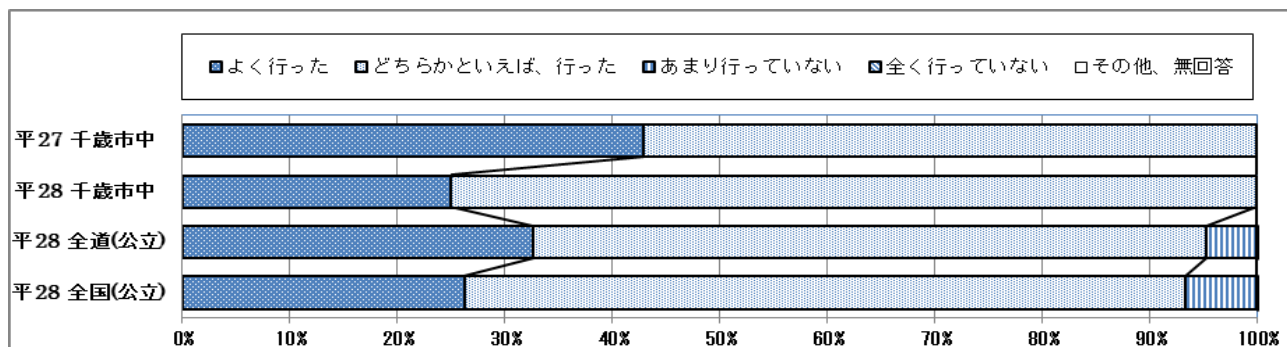
質問番号	質問事項（＊学校質問紙）
39	調査対象学年の児童に対して、前年度までに、様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしましたか



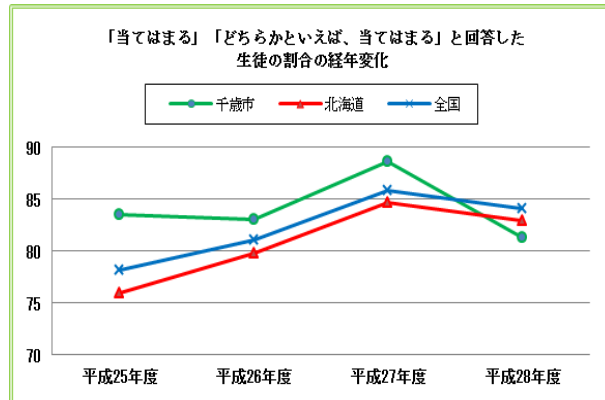
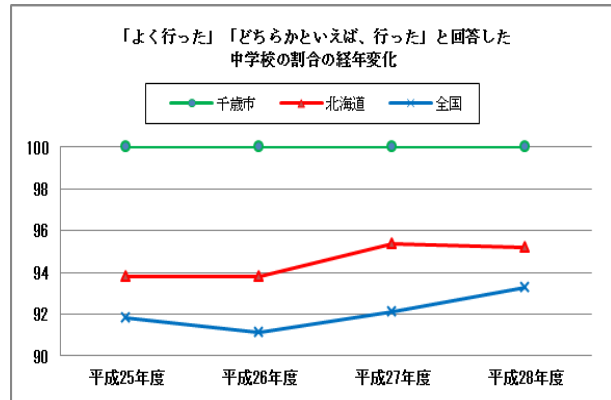
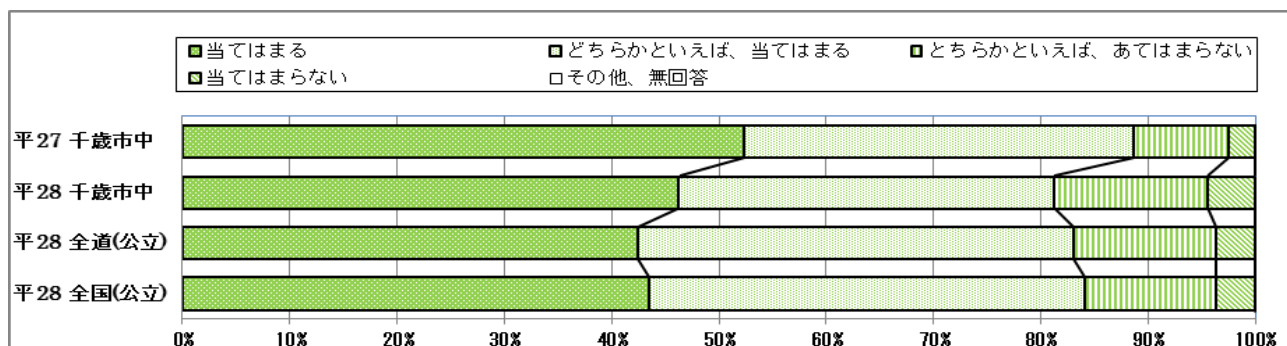
質問番号	質問事項（＊児童質問紙）
48	5年生までに受けた授業では、自分の考えを発表する機会が与えられていたと思いますか



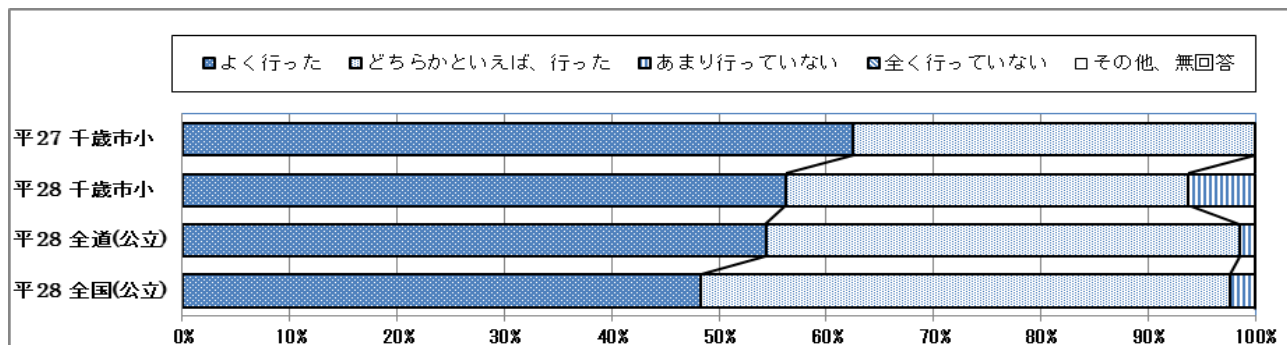
質問番号	質問事項（＊学校質問紙）
39	調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしましたか



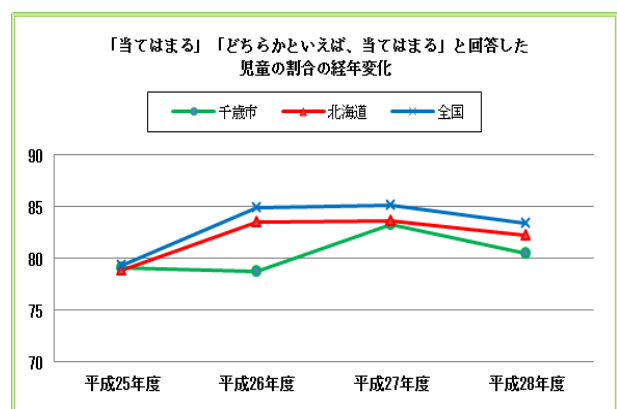
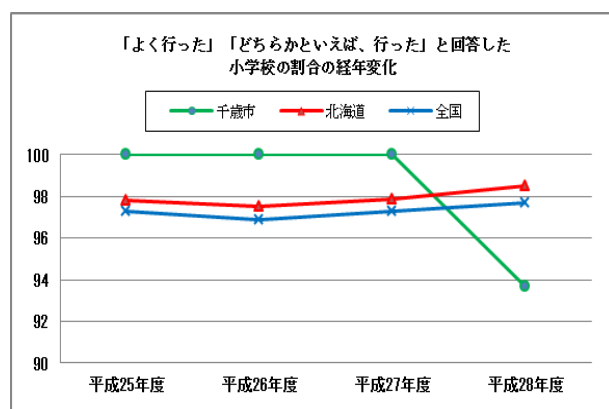
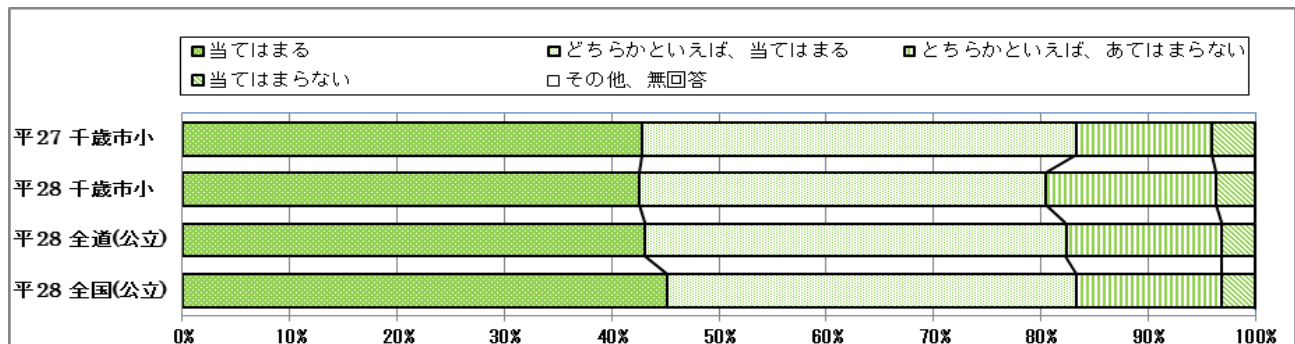
質問番号	質問事項（*生徒質問紙）
48	中学校1，2年生のときに受けた授業では、自分の考えを発表する機会が与えられていたと思いますか



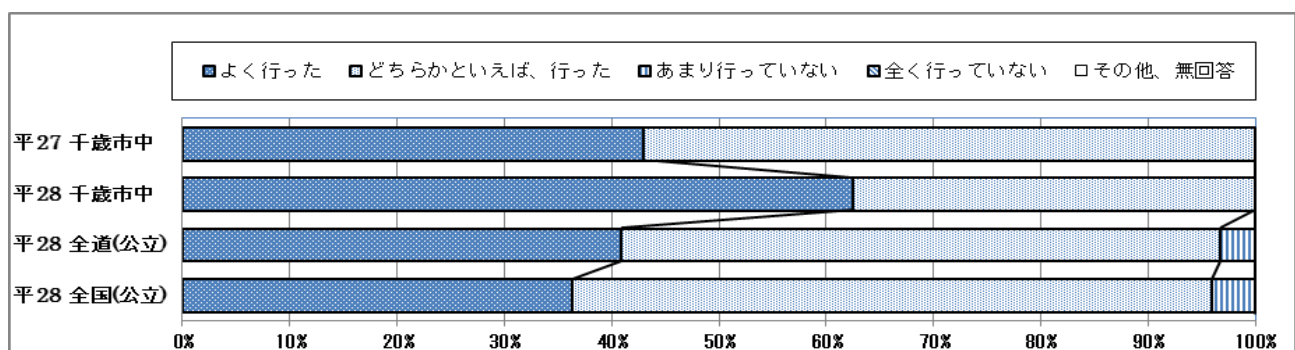
質問番号	質問事項（*学校質問紙）
40	調査対象学年の児童に対して、前年度までに、発言や活動の時間を確保して授業を進めましたか



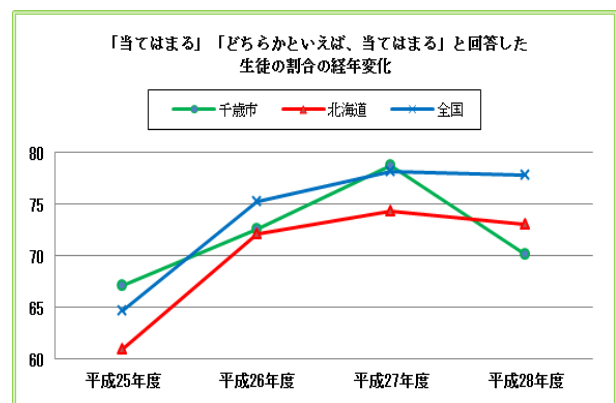
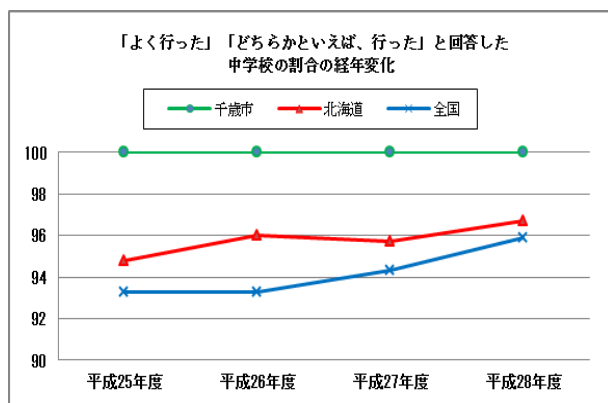
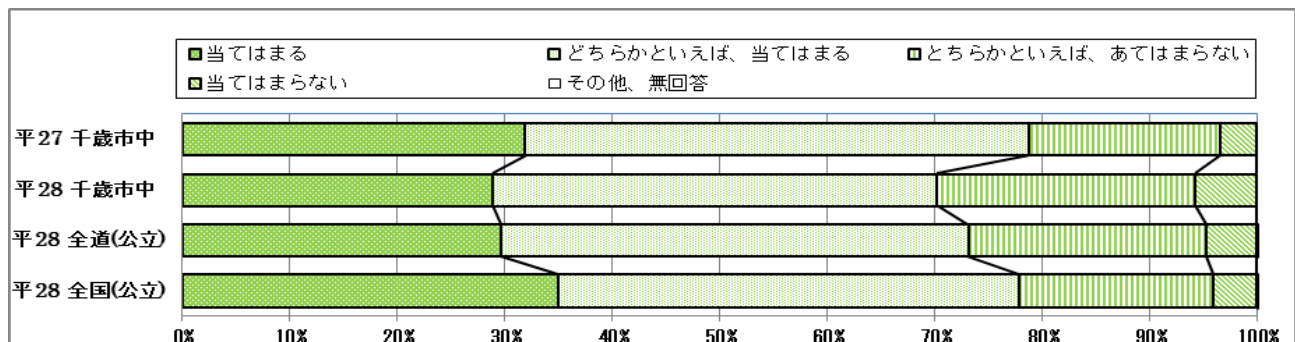
質問番号	質問事項（＊児童質問紙）
49	5年生までに受けた授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか



質問番号	質問事項（＊学校質問紙）
40	調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、発言や活動の時間を確保して授業を進めましたか



質問番号	質問事項（* 生徒質問紙）
49	中学校1，2年生のときに受けた授業では、学級の生徒との間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか



授業に対する教師と児童生徒の意識は依然隔たりがあり、昨年度より拡大した。

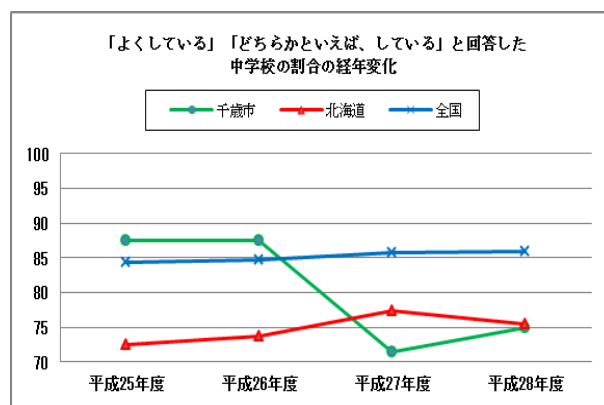
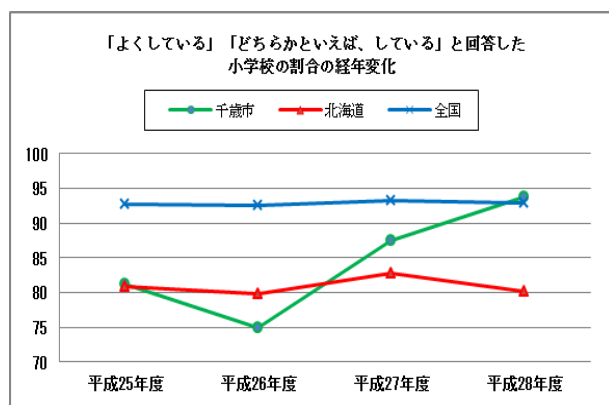
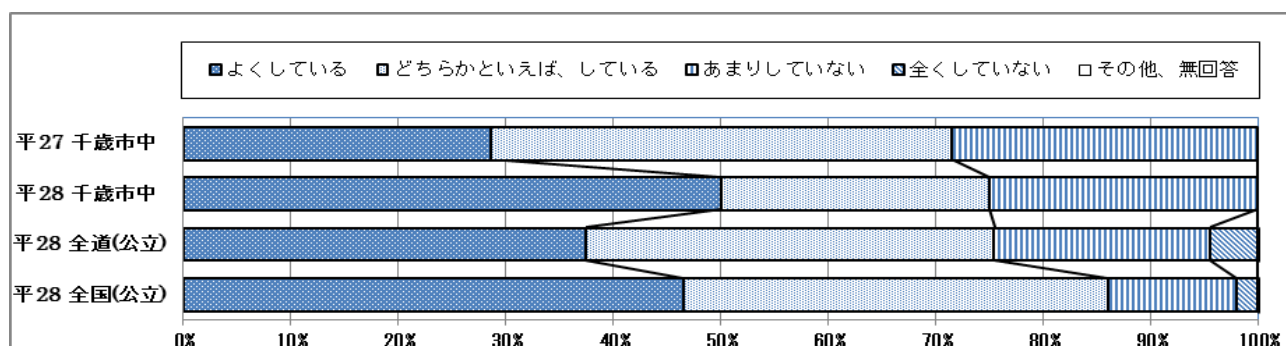
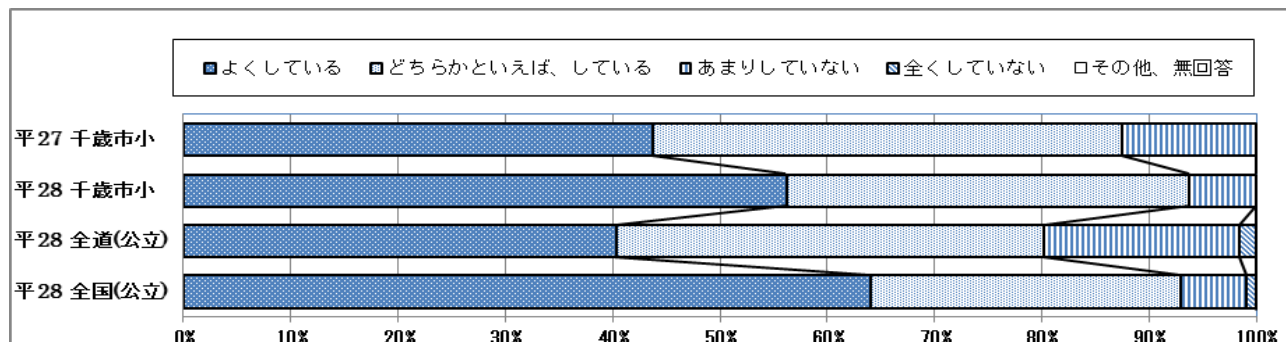
学校質問紙では「児童生徒の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしているか」という質問に対して、小学校・中学校全ての学校が「よく行った」「どちらかといえば、行った」と回答しているが、児童生徒質問紙では「自分の考えを発表する機会が与えられていたと思うか」との質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した小学生は83.1%、中学生は81.3%であり、前年度より小学生で2.4ポイント、中学生で7.3ポイントの減少となった。

また、学校質問紙では「児童生徒に対して、発言や活動の時間を確保して授業を進めたか」という質問に対して、中学校では全ての学校が「よく行った」「どちらかといえば、行った」と回答しているが、小学校では93.7%に減少した。児童生徒質問紙では、「授業で、話し合う活動をよく行っていると思うか」という質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した小学生は80.5%、中学生では70.2%であり、前年度より小学生で2.8ポイント、中学生で8.6ポイントの減少となった。

年々、教師と指導を受ける児童生徒の間の意識差は縮小してきていたが、今年度は、全国・全道的にも意識差の拡大がみられる。学校は、自校の状況を的確に分析し、児童生徒による授業評価の実施や評価項目の見直しなど、より一層、子どもの視点に立った授業改善を進めていく必要がある。

講師等を招聘した研修の実施

質問番号	質問事項
小102 中100	学校でテーマを決め、講師を招聘するなどの校内研修を行っていますか



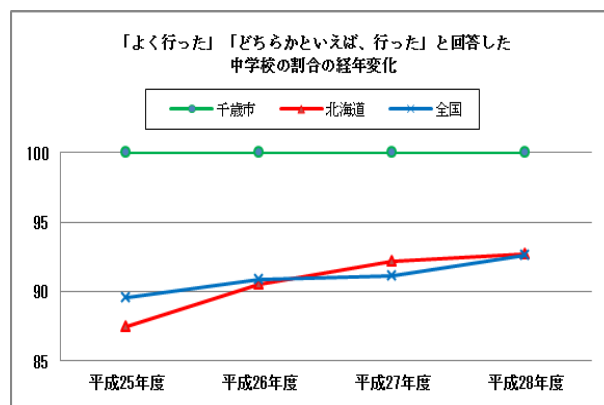
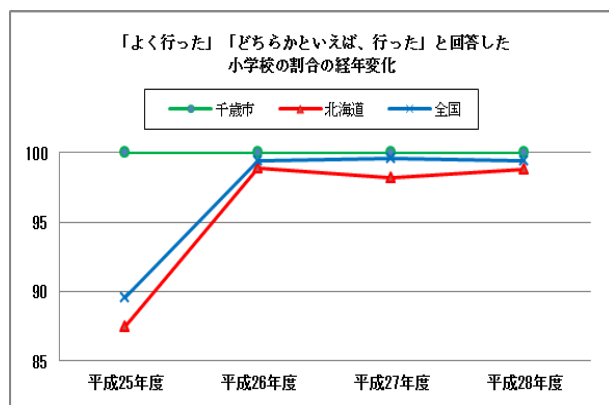
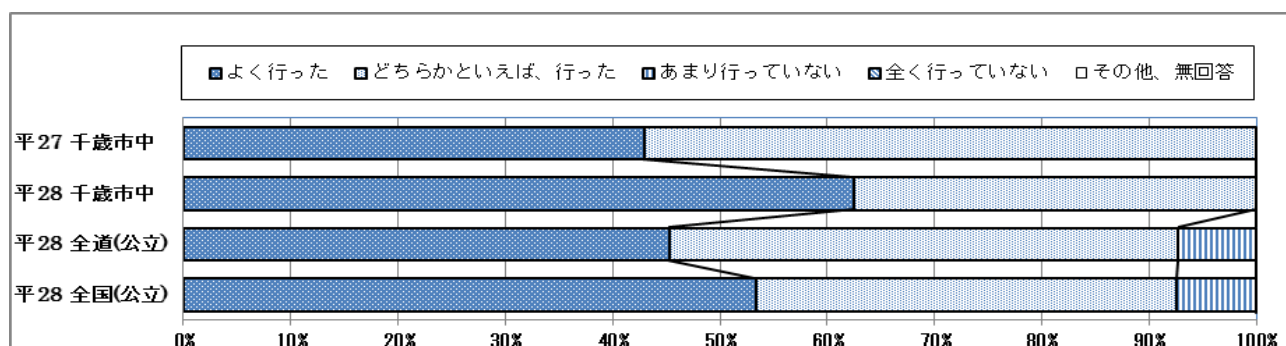
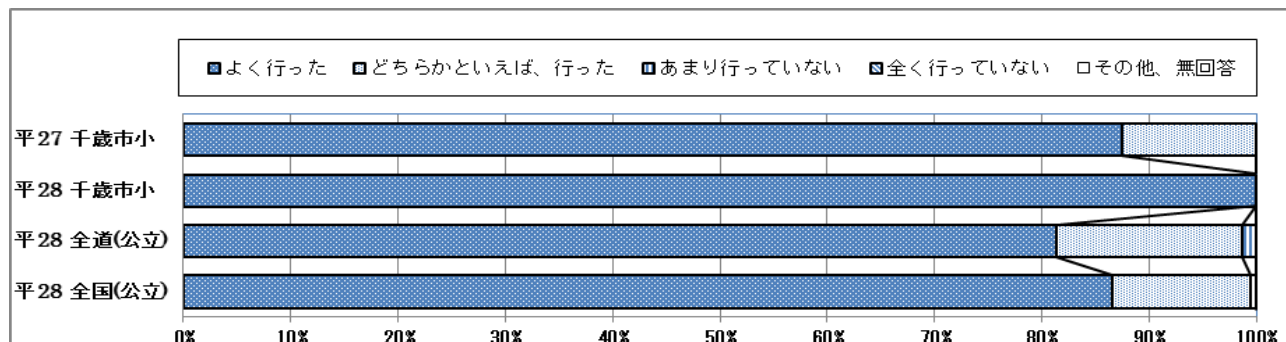
小学校では全国と同様、中学校でも差が縮まった。

小中学校ともに「よくしている」と回答した学校（小 56.3%、中 50.0%）は前年度（小 43.8%、中 28.6%）より増加し、全国（小 64.1%、中 46.5%）と同様である。中学校では、「どちらかといえば、している」と回答した学校が全国に比べ少ないため差があるが、学校の取組は進んでいる。

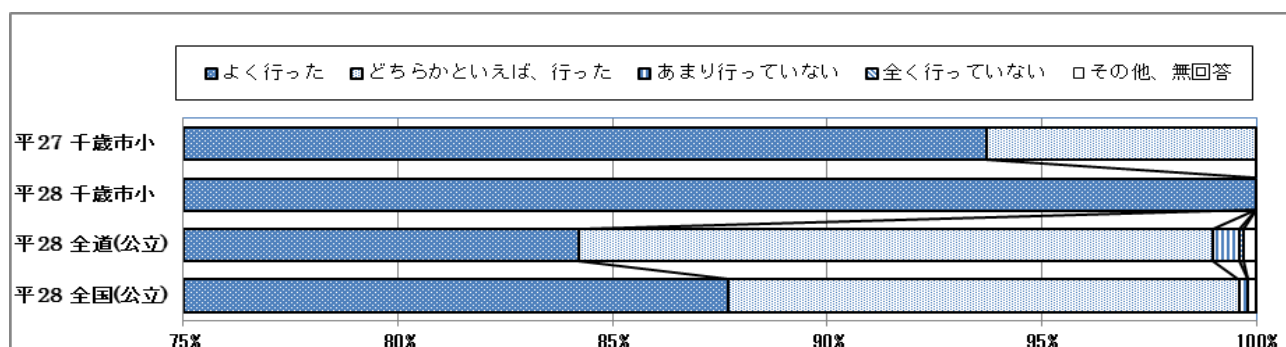
今後は、「学校力向上に関する総合実践事業」や「地域連携研修事業」の推進校で行っている専門家を招いての講演会や実技研修等に参加し自校での研修に還元できるよう校内の研修参加体制の充実を図ったり、研修テーマに精通した市内の実践家や近隣校に在籍する教職員に講師を依頼したりするなど、研修の在り方について創意工夫し、教職員の専門性の向上を図っていく必要がある。

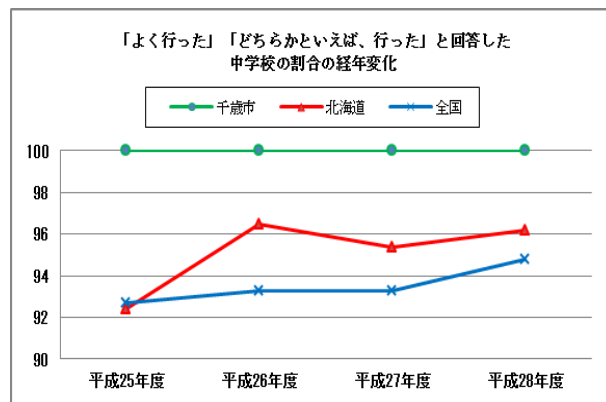
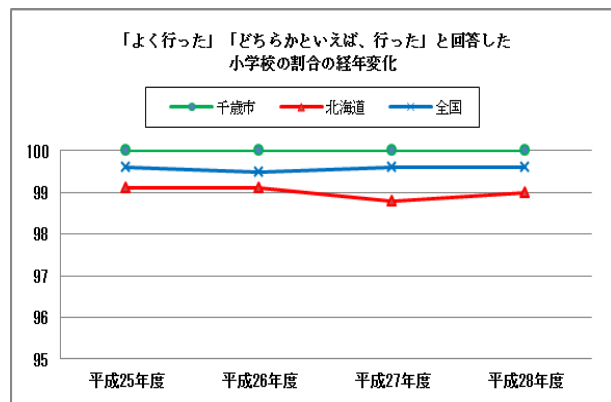
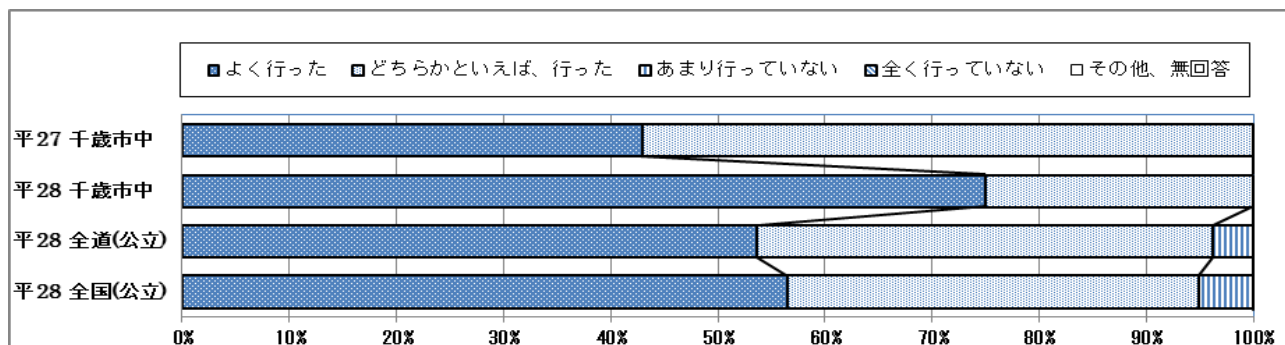
家庭学習（宿題）

質問番号	質問事項
小 9 2 中 9 0	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、国語の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えましたか



質問番号	質問事項
小 9 4 中 9 2	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、算数（数学）の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えましたか



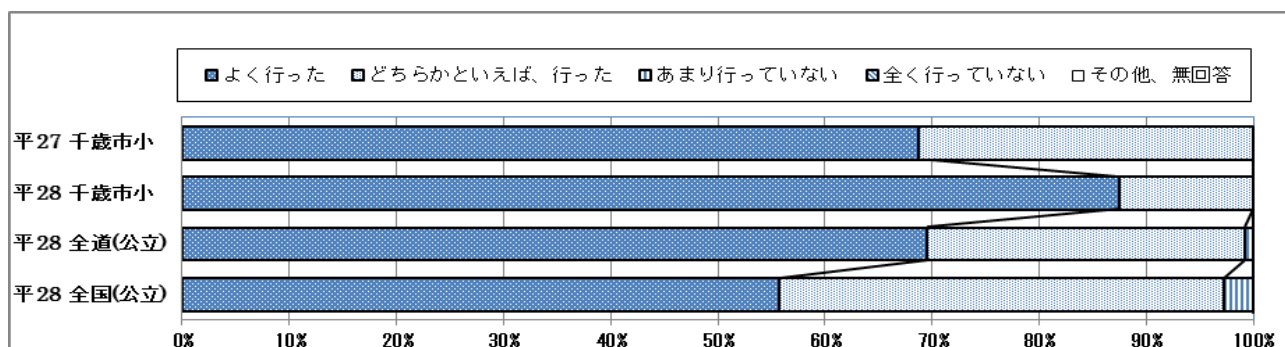


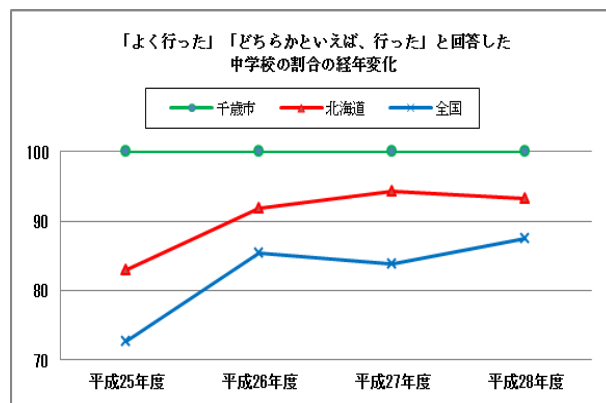
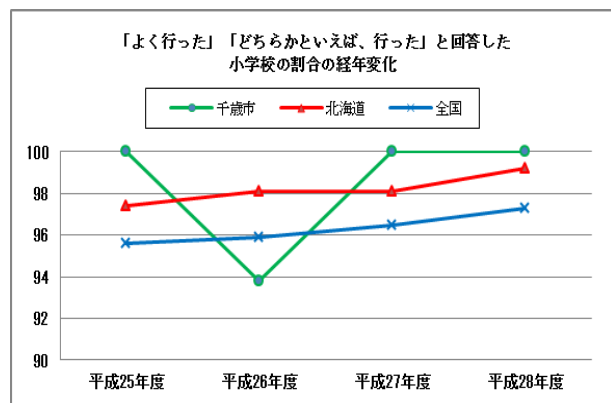
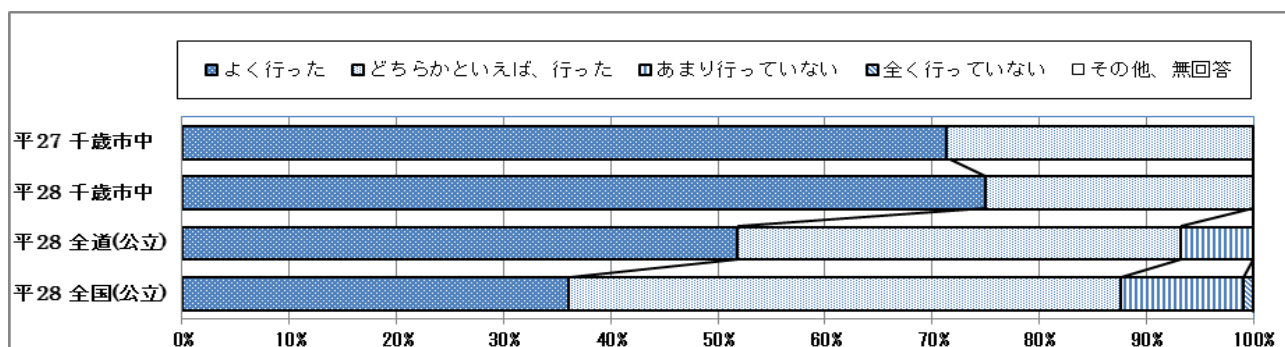
国語、算数（数学）の課題（宿題）を与えている割合は、小学校、中学校ともに肯定的回答が100%である。

「家庭学習の課題（宿題）を与えたか」という質問に対し、「よく行った」と回答した小学校は国語・算数ともに100%であり、前年度（国語87.5%、算数93.8%）より増加した。中学校でも「よく行った」と回答した学校は、国語62.5%、数学75.0%であり、前年度（国語42.9%、数学42.9%）より大幅に増加した。学力向上策の一環として市内全校で取り組んでいる成果として捉えることができる。

児童生徒質問紙による学習習慣の回答からは、小学校においては宿題に取り組む児童が増加しており、学校質問紙との回答と整合性がみられる。一方で、中学校においては宿題の取組は全国とほぼ同様であるが、1週間あたりの学習時間は全国と比べ依然として少ない状況であることから、課題（宿題）を提供する教科や量について検討し取組を進める必要がある。

質問番号	質問事項
小96 中94	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、保護者に対して児童（生徒）の家庭学習を促すような働きかけを行いましたか（国語／算数（数学）共通）



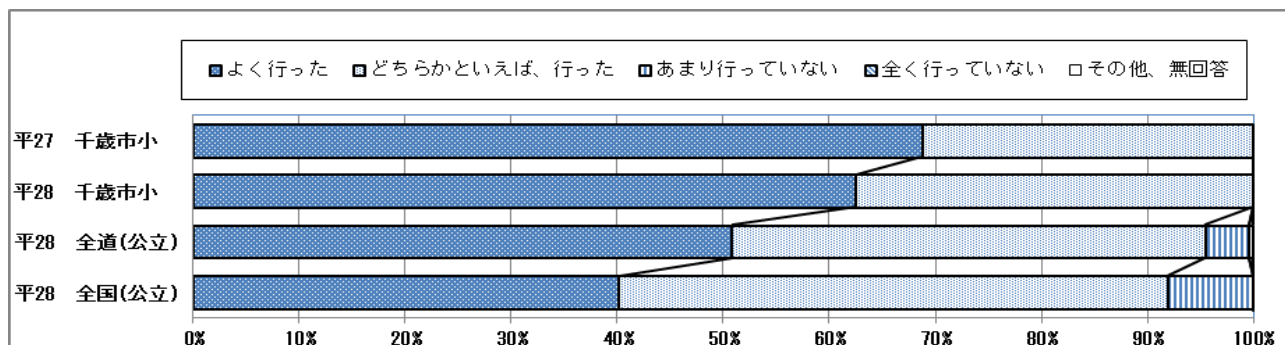


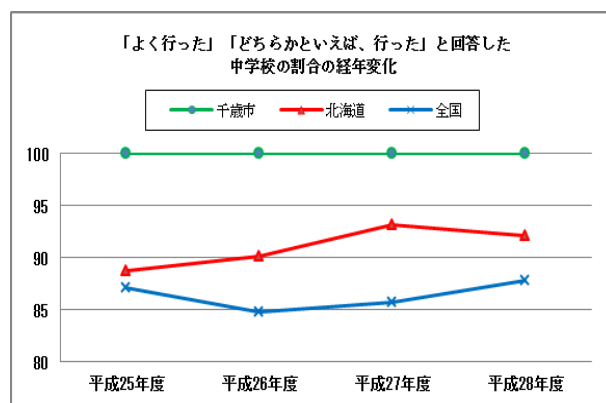
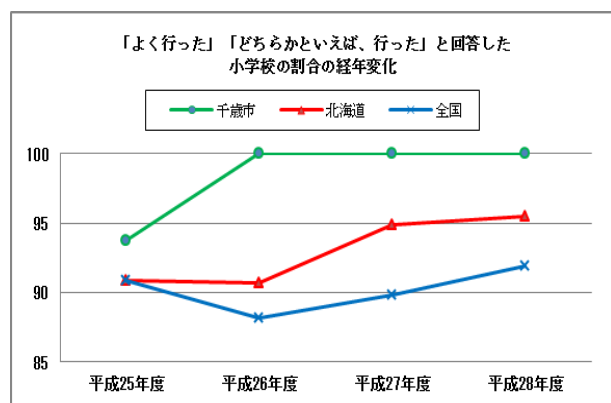
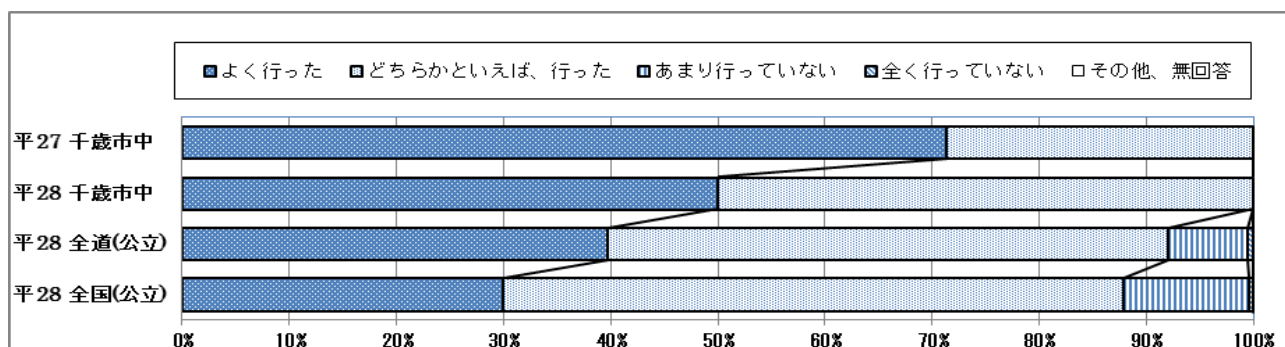
保護者への働きかけは小学校・中学校ともに「よく行った」「どちらかといえば、行った。」合わせて100%である。

「保護者に対して家庭学習を促す働きかけを行ったか」という質問に対し、「よく行った」と回答した学校は小学校 87.5%、中学校 75.0%となっており、全国（小 55.8%、中 36.0%）と比較すると大きく上回っている。「よく行った」「どちらかといえば、よく行った」と回答した学校を合わせると、小学校、中学校ともに 100%である。

小中の連携のもとに進められている、家庭学習の習慣化の啓発や生活リズムチェックシートに保護者が家庭学習を確認する欄を設ける取組などの成果と捉えることができる。

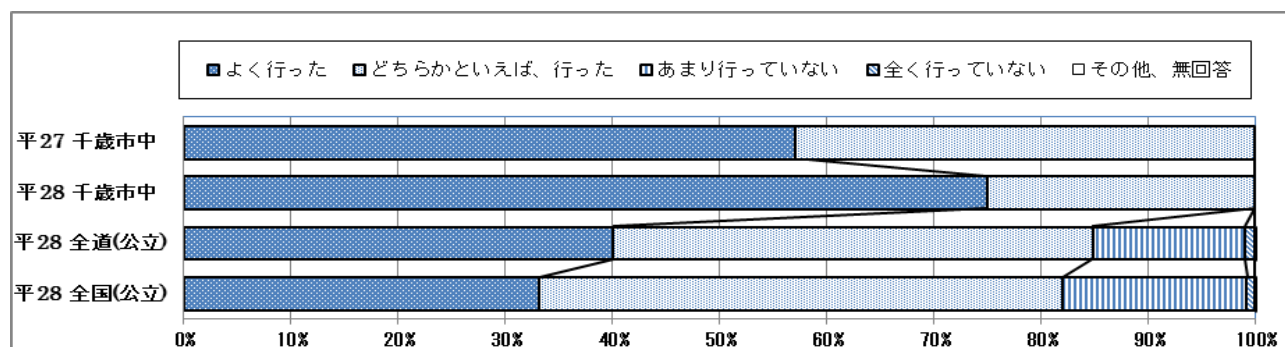
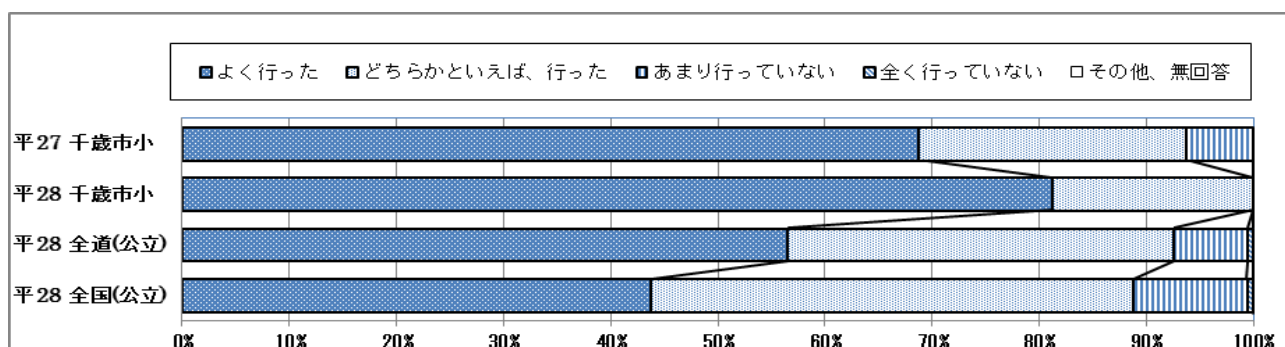
質問番号	質問事項
小 9 9 中 9 7	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、家庭学習の取組として、児童（生徒）に家庭での学習方法を具体例を挙げながら教えるようにしましたか（国語／算数（数学）共通）

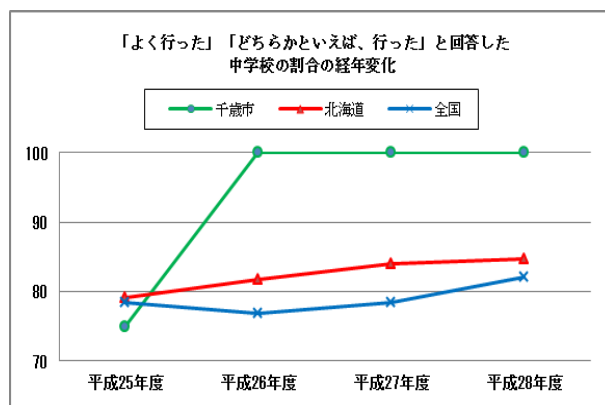
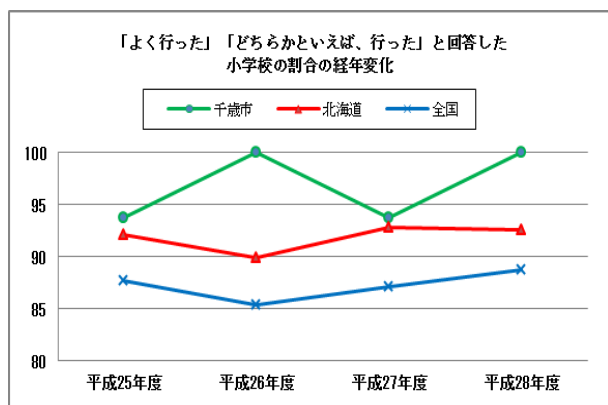




「児童・生徒に対して家庭での学習方法を具体例を挙げながら教えたか」という質問に対して「よく行った」と回答した学校は小学校 62.5%、中学校 50.0%となっており、全国（小 40.1%、中 29.9%）と比較すると小中ともに上回っているものの、前年度の市内の状況（小 68.8%、中 71.4%）とくらべると減少傾向にある。学校は家庭学習の習慣が身に付くよう、そのきっかけ作りとして宿題を提供しているが、自分で課題を見つけ、課題に取り組む自学の仕方についても、きめ細かな指導が求められている。

質問番号	質問事項
小 9 7 中 9 5	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、家庭学習の課題の与え方について、校内の教職員で共通理解を図りましたか（国語／算数（数学）共通）

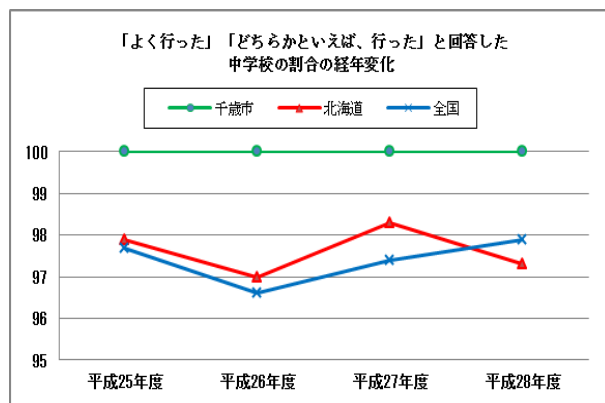
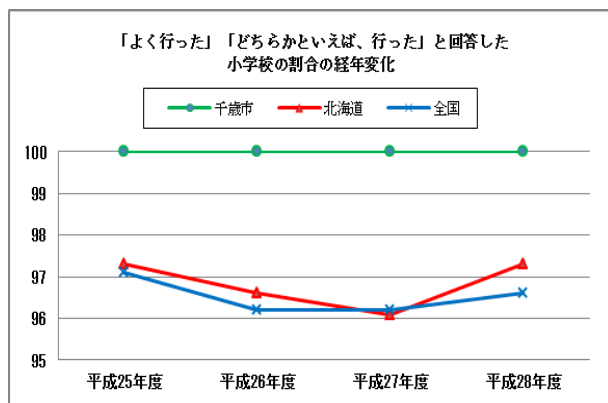
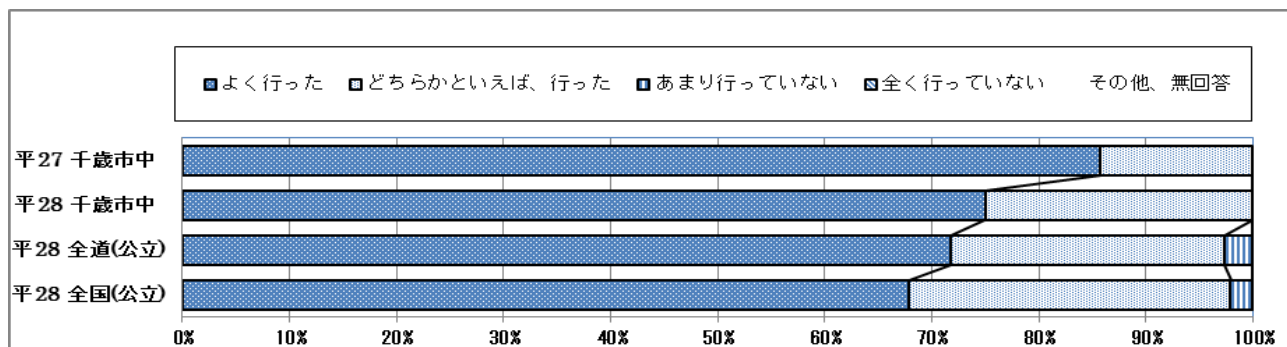
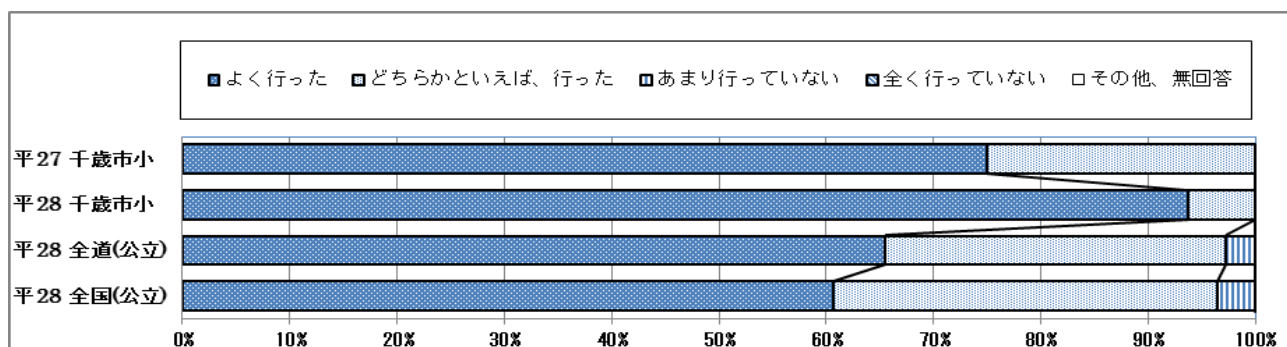




「家庭学習の課題の与え方について、教職員で共通理解を図ったか」という質問について、「よく行った」と回答した学校は小学校 81.3%、中学校 75.0%となっており、全国（小 43.7%、中 33.2%）と比較しても大きく上回っている。前述の宿題の提供など、市内統一の取組が徹底されているためと考えられる。今後も、学習時間の増加、課題（宿題）内容の充実を図りながら家庭での学習を定着させていく必要がある。

学習規律

質問番号	質問事項
5 1	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、学習規律（私語をしない、話をしている人の方を向いて聞く、聞き手に向かって話をする、授業開始のチャイムを守るなど）の維持を徹底しましたか



小学校・中学校ともに全国を上回る取組がなされている。

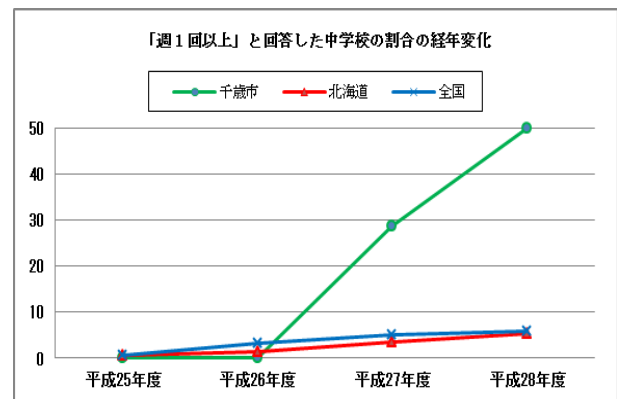
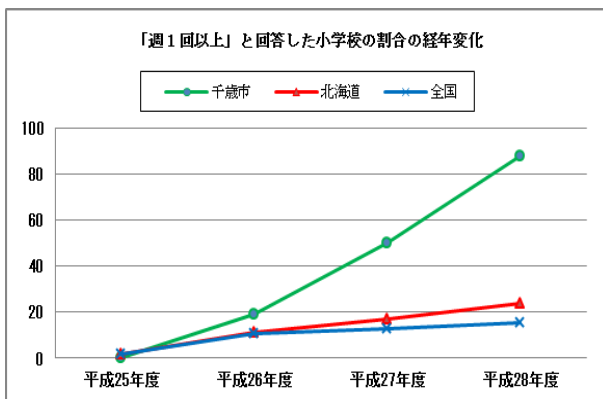
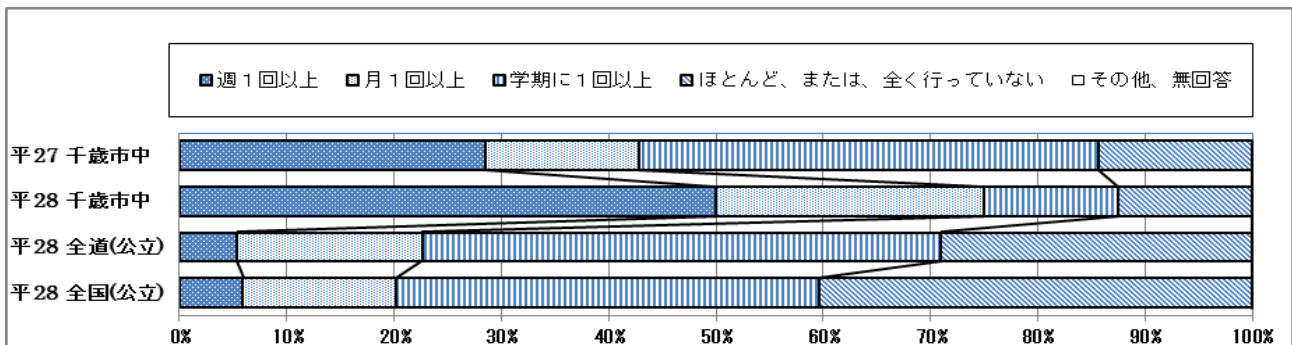
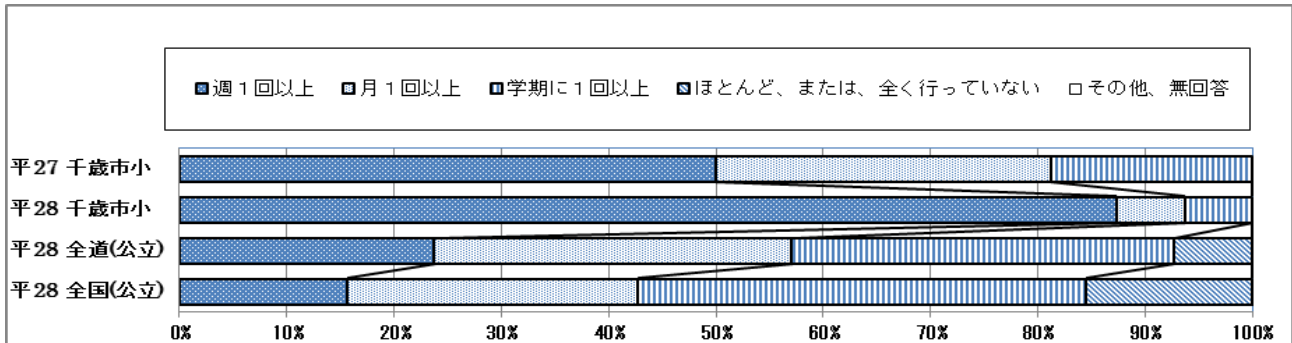
「よく行った」「どちらかといえば、よく行った」と回答した学校を合わせると、小学校、中学校ともに 100%である。

小学校では、「よく行った」と回答した学校が 93.8%と前年の 75.5%を上回る取組がされている。一方、中学校では前年より数値は下がったものの 75.0%であり、全国の 67.9%を上回っている。

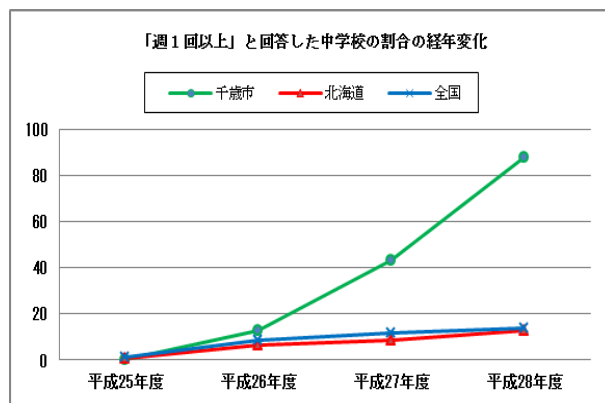
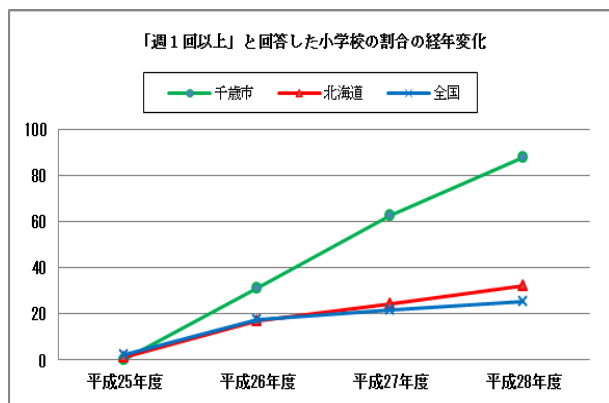
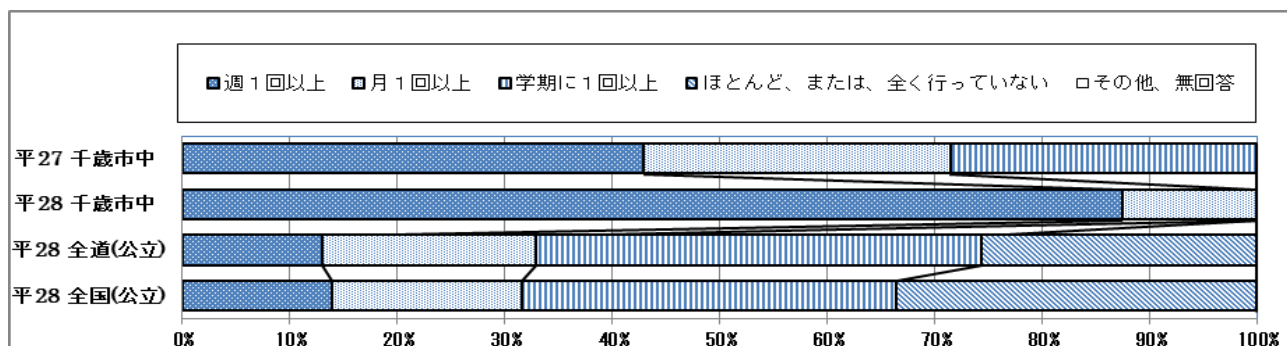
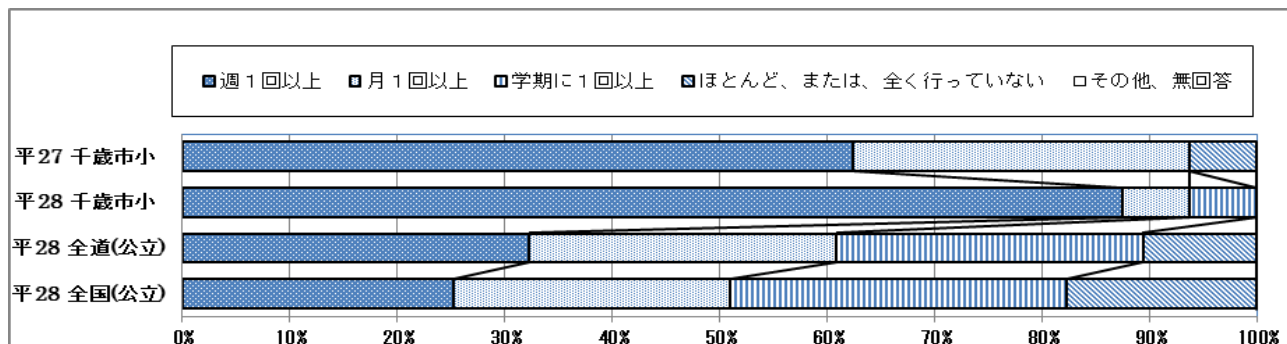
今後も児童生徒に学習のきまりのよさを理解させ、校内で統一した指導を進める必要がある。また、中学校への進学後も基本的な学習規律は共通化されていることが重要であることから、小中連携を意識し、義務教育の 9 年間を見通した取組となるよう中学校区での一層の連携が大切である。

ICT機器の活用

質問番号	質問事項
57	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度に、国語の授業において、コンピューター等の情報通信技術（パソコン（タブレット端末を含む）電子黒板、実物投影機、プロジェクター、インターネットなどを指す）を活用した授業を行いましたか



質問番号	質問事項
58	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度に、算数（数学）の授業において、コンピューター等の情報通信技術（パソコン（タブレット端末を含む）、電子黒板、実物投影機、プロジェクター、インターネットなどを指す）を活用した授業を行いましたか



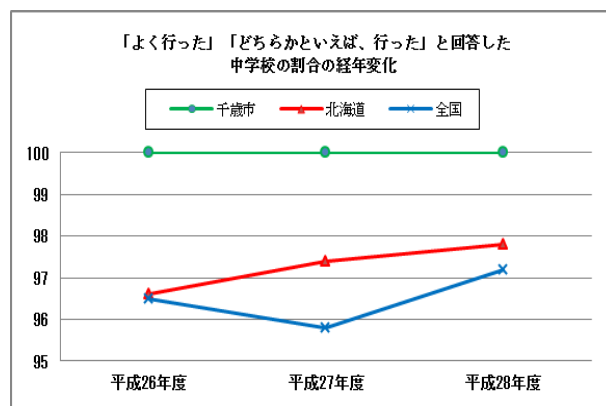
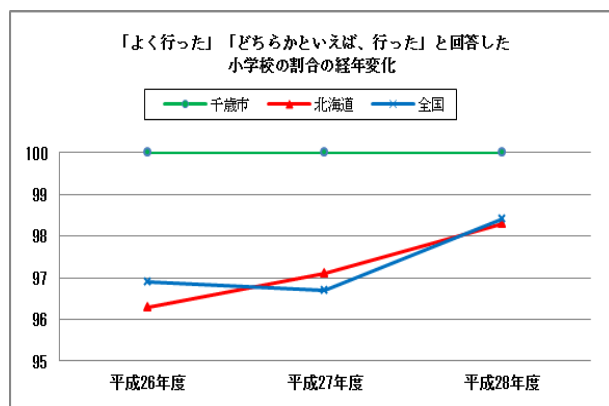
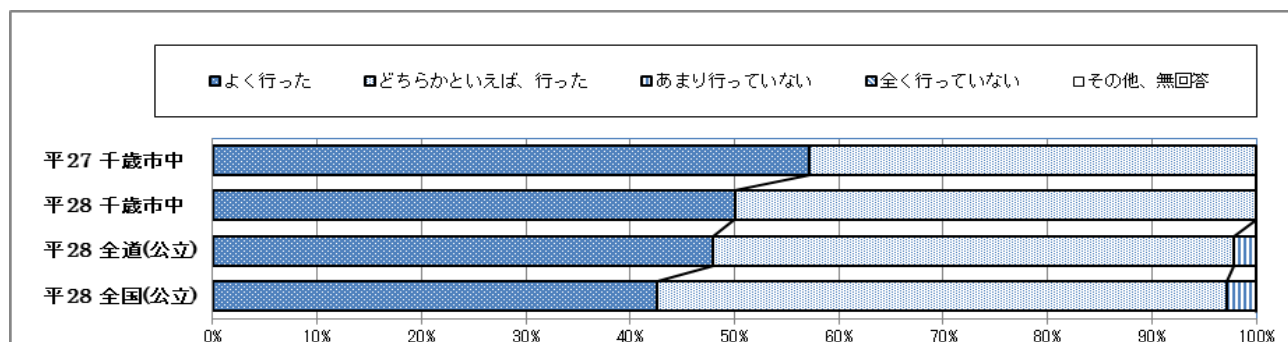
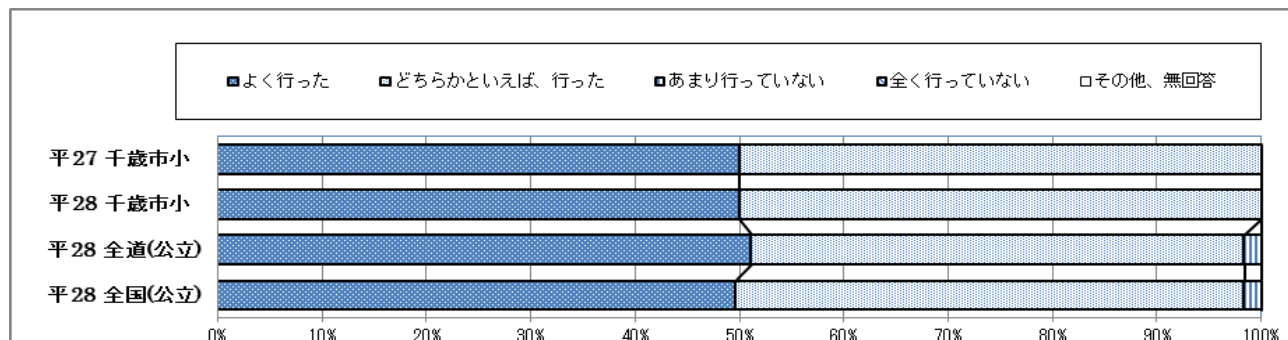
小学校・中学校ともに、全国を大幅に上回っている。

ICT機器は、全ての学校で国語、算数（数学）のみならず他教科でも日常的に授業で活用されており千歳の教育の特徴となっている。全普通教室への電子黒板・実物投影機等の配備に加え、デジタル教科書が、平成27年度に小学校へ、平成28年度は中学校への配備を終えた。また、学校からの要望である、小学校少人数指導用教室、中学校特別教室、小・中学校特別支援学級教室への追加等新たな整備も始まり、今後の一層の活用が期待できる。設問は前年度実績であり、中学校の国語の活用率は、今年度デジタル教科書が配備されたことから、今後上昇するものとする。

今後は、授業でのより効果的な活用方法等について校内外での研修を充実させ、授業改善に取り組むことが必要である。

児童生徒のよさの評価

質問番号	質問事項
53	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、学校生活の中で、児童（生徒）一人一人のよい点や可能性を見付け、児童（生徒）に伝えるなど積極的に評価しましたか。



小学校・中学校ともに全国を上回っており、肯定的回答が100%である。

中学校においては、前年度より「よく行った」との回答が7.1ポイント減少し50.0%となっているが、全国（42.6%）を上回る状況を維持している。しかし、児童生徒質問紙からは、千歳市の子どもたちの自尊感情は年々上昇の傾向が見られるものの、依然として全国平均を下回る状況が小中学校ともに続いている。このような状況から各学校の特色を生かし、動植物の世話や飼育など子ども一人一人の自主的な活動が活発に展開され子どもの活動が見える場を創出すること、学習の成果や子どもの活動の様子等を発信し努力の大切さを認め合う雰囲気醸成を図ることなど、子どもの自己有用感や自己肯定感を高める手だてを工夫し、それぞれの発達段階に応じた児童生徒の積極的な評価を各学校で確実に積み重ねていく必要がある。（＊本設問は平成26年度から実施）